

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30

平成25年度発掘調査報告

(第1分冊)

瑞泉寺周辺遺跡

大倉幕府周辺遺跡群

名越ヶ谷遺跡

大倉幕府周辺遺跡群

大慶寺旧境内遺跡

福泉やぐら群

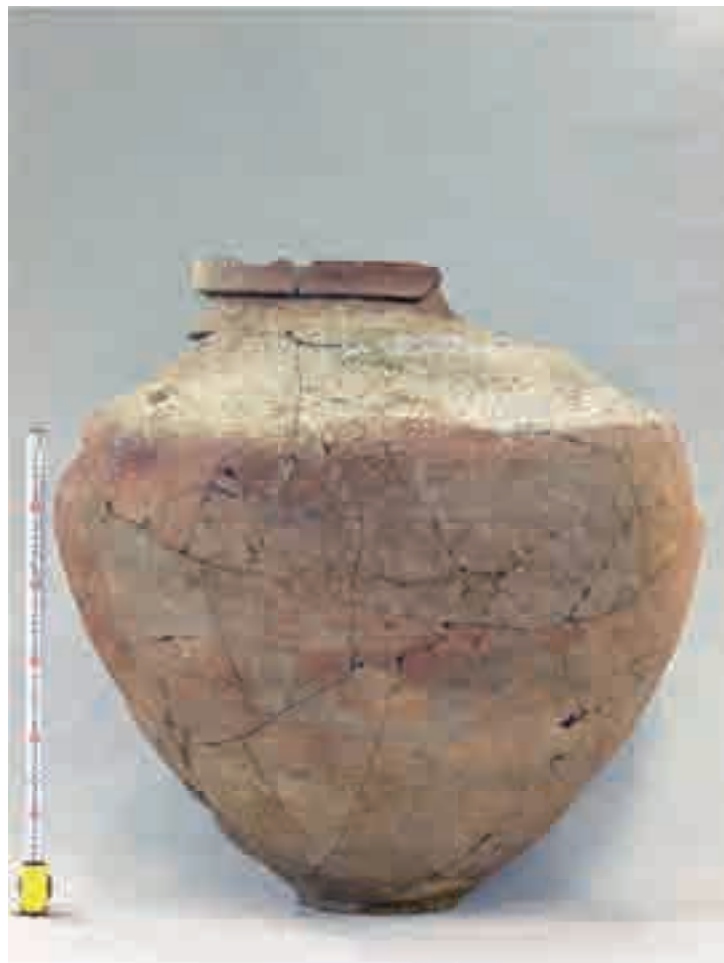
坂ノ下遺跡

平成26年3月

鎌倉市教育委員会



瑞泉寺周辺遺跡（二階堂字紅葉ヶ谷674番1） 第2面全景（南から）



名越ヶ谷遺跡（大町四丁目1858番4） 第3面イコウ49出土常滑産甕

ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成17、18、20、21、24年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として13ヶ所の調査成果を掲載しています。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成26年3月31日
鎌倉市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成25年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書（第1分冊及び第2分冊）である。
- 2 本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・別図のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総目次

(第1分冊)

ごあいさつ	I
例言	II
目次	III
本誌掲載の平成17・18・20・21・24年度発掘調査地点一覧	VI
平成25年度調査の概観	VII
調査地点位置図	X
1 瑞泉寺周辺遺跡 (No.338) 二階堂字紅葉ヶ谷674番1地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第二章 調査の概要	9
第三章 検出遺構と出土遺物	14
第四章 まとめ	35
2 大倉幕府周辺遺跡群 (No.49) 二階堂字荏柄76番8地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	59
第二章 発見された遺構と遺物	66
第三章 まとめ	108
3 名越ヶ谷遺跡 (No.231) 大町四丁目1858番-4	
第一章 調査地点の位置と歴史的環境	145
第二章 検出した遺構と遺物	151
第三章 まとめ	165
4 大倉幕府周辺遺跡群 (No.49) 雪ノ下四丁目570番1地点	
第一章 調査地点概観	182
第二章 調査の概略	185
第三章 調査結果	187
第四章 まとめ—調査地点における滑川右岸の変遷について	203

5 大慶寺旧境内遺跡 (No.361) 寺分一丁目943番2外地点	
第一章 遺跡と調査地点の概観	228
第二章 調査の概要	234
第三章 調査結果	236
第四章 まとめと考察	252

6 福泉やぐら群 (No.447) 今泉三丁目292番他地点	
第一章 遺跡と調査地点の概観	273
第二章 調査概要	278
第三章 調査結果	280
第四章 変遷と年代—まとめ	298

7 坂ノ下遺跡 (No.217) 坂ノ下50番3外地点	
第一章 本調査地点の位置と歴史的環境	317
第二章 調査の概要	321
第三章 発見された遺構	325
第四章 発見された遺物	334
第五章 まとめ	351

(第2分冊)

例言	II
目次	III

8 玉縄城跡 (No.63) 植木字植谷戸192番4外地点	
第一章 調査地点の歴史的環境	4
第二章 調査の経過と土層	11
第三章 検出された遺構と遺物	12
第四章 まとめ	12

9 上杉定正邸跡 (No.188) 扇ガ谷二丁目195番2	
第一章 遺跡概観	25
第二章 調査の概要	31
第三章 検出遺構と出土遺物	39
第四章 まとめ	74

10 新善光寺跡 (No.279) 材木座四丁目579番4地点	
第一章 遺跡の概観	107
第二章 調査の概要	113
第三章 検出遺構と出土遺物	118
第四章 まとめ	130
11 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 小町二丁目364番17	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	149
第二章 調査の方法と経過	152
第三章 基本土層	153
第四章 発見された遺構と遺物	154
第五章 調査成果のまとめ	172
12 米町遺跡 (No.245) 大町二丁目2311番5	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	185
第二章 調査の方法と経過	187
第三章 基本土層	188
第四章 発見された遺構と遺物	192
第五章 調査成果のまとめ	213
13 田楽辻子周辺遺跡 (No.33) 浄明寺二丁目569番10	
第一章 調査地点の概観	267
第二章 調査の概要	276
第三章 検出された遺構と出土遺物	281
第四章 まとめ	339

本誌掲載の平成 17・18・20・21・24 年度発掘調査地点一覧

第1分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ▲	瑞泉寺周辺遺跡 (NO.338)	二階堂字紅葉ヶ谷 674 番 1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	56.00	平成 17 年 11 月 8 日 ～平成 18 年 1 月 18 日
2 ▲	大倉幕府周辺遺跡群 (NO.49)	二階堂字荏柄 76 番 7 外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	33.00	平成 18 年 2 月 23 日 ～平成 18 年 4 月 25 日
3 □	名越ヶ谷遺跡 (NO.231)	大町四丁目 1858 番 4	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	9.75	平成 18 年 5 月 1 日 ～平成 18 年 6 月 7 日
4 □	大倉幕府周辺遺跡群 (NO.49)	雪ノ下四丁目 570 番 1	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	32.00	平成 18 年 7 月 12 日 ～平成 18 年 8 月 24 日
5 □	大慶寺旧境内遺跡 (NO.361)	寺分一丁目 943 番 2 外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	56.10	平成 18 年 9 月 19 日 ～平成 18 年 11 月 2 日
6 □	福泉やぐら群 (NO.447)	今泉三丁目 292 番外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	やぐら	63.90	平成 18 年 11 月 15 日 ～平成 19 年 1 月 5 日
7 ●	坂ノ下遺跡 (NO.217)	坂ノ下 50 番 3 外	個人専用住宅 (地盤の表層改良)	都市	48.00	平成 20 年 8 月 13 日 ～平成 20 年 9 月 19 日

第2分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
8 ●	玉縄城跡 (NO.63)	植木字植谷戸 192 番 4 外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	城館	97.50	平成 20 年 4 月 15 日 ～平成 20 年 5 月 22 日
9 ●	上杉定正邸跡 (NO.188)	扇ガ谷二丁目 195 番 2	店舗併用住宅 (地盤の柱状改良)	城館	25.00	平成 21 年 2 月 16 日 ～平成 21 年 4 月 10 日
10 △	新善光寺跡 (NO.284)	材木座四丁目 579 番 4	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	50.00	平成 21 年 4 月 14 日 ～平成 21 年 6 月 10 日
11 △	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	小町二丁目 364 番 17	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	30.00	平成 21 年 4 月 17 日 ～平成 21 年 6 月 1 日
12 △	米町遺跡 (NO.245)	大町二丁目 2311 番 5	個人専用住宅 (深基礎)	都市	55.00	平成 21 年 6 月 22 日 ～平成 21 年 8 月 31 日
13 ■	田楽辻子周辺遺跡 (NO.33)	浄明寺二丁目 569 番 10	個人専用住宅 (基礎工事)	屋敷跡	58.50	平成 24 年 6 月 14 日 ～平成 24 年 7 月 23 日

▲印は平成 17 年度実施の発掘調査
 □印は平成 18 年度実施の発掘調査
 ●印は平成 20 年度実施の発掘調査
 △印は平成 21 年度実施の発掘調査
 ■印は平成 24 年度実施の発掘調査

平成25年度調査の概観

平成25年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査1件を含む7件であり、調査面積は499.8㎡であった。これを前年度の9件、669㎡と比較してみると件数は2件の減少となり、調査面積は169.2㎡の減少となった。1件の調査面積は平均で71.4㎡（前年度は83.63㎡）であり、1件あたりの面積は前年度よりも減少している。

調査原因は個人専用住宅の建設が6件、店舗等併用住宅の建設が1件である。これらの工種別内訳は、鋼管杭打ち工事が2件(29%)、地盤改良工事が5件(71%)となっている。今年度も鋼管杭打ち工事や地盤改良工事が発掘調査の主体的な原因になっている傾向が顕著にみられた。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。(調査面積及び調査期間等については「平成25年度調査地点一覧」を参照。)

1 公方屋敷跡 (No.268)

浄明寺四丁目に位置する。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。調査の結果、14～15世紀にかけての、かわらけ廃棄遺構、土坑、柱穴、溝を確認した。出土した遺物の大半は、廃棄遺構内出土のかわらけであった。

2 名越ヶ谷遺跡 (No.231)

大町六丁目に位置する。地盤の柱状改良工事をともなう個人専用住宅の建築に先立ち発掘調査を実施した。調査の結果、調査区南側の大部分は現代に丘陵裾部を埋め立てた造成土であることが判明した。北側には13世紀後半～14世紀代の整地層が複数枚確認でき、面上では浅い溝や小穴などの遺構が検出された。中世の基盤層となる黒色粘土層からは古墳時代前期の土器片が少量出土したが、明確な遺構の発見には至らなかった。

3 若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

御成町に所在し、鎌倉駅西側を南北に通る御成通りに東面する。地盤の柱状改良工事を内容とする店舗併用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。調査の結果、13世紀後半から14世紀代にかけての3時期に亘る生活面が確認でき、板壁建物や南北軸に掘られた溝などを発見した。また、内部に腐植した土が多く残る土坑が数基確認され、トイレもしくは肥溜めと思われる遺構も発見された。残存していた板壁建物は、今後の中世鎌倉での建築構造を検討する上で重要な発見であった。

4 小町大路東遺跡 (No.233)

大町一丁目に位置する。小町大路の東側、妙本寺の西南に所在する。個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。基礎工事の掘削深度は2mであり、調査の深度もそこまでにとどめた。それより下には遺跡が保存されている。

調査の結果、13世紀から14世紀にかけての土地利用の痕跡を確認することができた。井戸と方形竪穴建物、多くの柱穴や礎石が出土し、当該地の土地利用の在り方について貴重な成果を得られた。

5 北条小町邸跡 (No.282)

雪ノ下一丁目に位置する。鋼管杭工事をともなう個人専用住宅の建築に先立ち発掘調査を実施した。調査の結果、13世紀前半～14世紀代の整地面が3枚ほど確認でき、13世紀前半には東西溝やこれに並行する柱穴列が検出され、屋敷地を分割する区画施設と考えられる。14世紀代では長方形の土坑が重複して掘られていた。各時期とも、出土遺物はかわらけが大半を占めている。

6 長谷小路周辺遺跡 (No.194)

由比ヶ浜三丁目に位置する。地盤改良を内容とする個人専用住宅の建築に伴い発掘調査を実施した。調査の結果、14世紀代の土坑、9世紀代の住居址を確認した。鎌倉における古代集落の広がりを明らかにする上でも重要な調査成果である。

7 今小路西遺跡 (No.201)

由比ヶ浜一丁目に位置する。鎌倉市中央図書館の西南にあたる。個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。調査の結果、13世紀から14世紀にかけての整地層と、柱穴や土坑が出土した。また中世以前の遺物も少数出土している。

平成 25 年度発掘調査地点一覧

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ★	公方屋敷跡 (No. 268)	浄明寺四丁目 292 番 1	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	屋敷跡	86.00	平成 25 年 3 月 1 日 ～平成 25 年 5 月 24 日
2	名越ヶ谷遺跡 (No. 231)	大町六丁目 1506 番 11 の一部	個人専用住宅 (柱状改良工事)	屋敷跡	55.00	平成 25 年 4 月 15 日 ～平成 25 年 7 月 2 日
3	若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)	御成町 773 番 2	店舗併用住宅 (柱状改良工事)	都 市	65.00	平成 25 年 5 月 16 日 ～平成 25 年 7 月 24 日
4	小町大路東遺跡 (No. 233)	大町一丁目 1147 番	個人専用住宅 (表層改良工事)	都 市	72.00	平成 25 年 5 月 23 日 ～平成 25 年 9 月 6 日
5	北条小町邸跡 (No. 282)	雪ノ下一丁目 403 番 14	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	屋敷跡	41.80	平成 25 年 10 月 10 日 ～平成 25 年 12 月 27 日
6	長谷小路周辺遺跡 (No. 194)	由比ガ浜三丁目 194 番 71	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	140.00	平成 25 年 11 月 1 日 ～平成 26 年 3 月 7 日
7 ◎	今小路西遺跡	由比ガ浜一丁目 160 番 17	個人住宅 (柱状改良工事)	城館跡	40.00	平成 26 年 1 月 14 日 ～平成 26 年 3 月 31 日

★印は平成 24 年度からの継続調査を示す。

◎印は平成 26 年度への継続調査を示す。

鎌倉市全図

平成25年度の緊急発掘調査地点(1~7)
本書掲載の平成17、18、20、21年度発掘調査地点(①~⑬)
※遺跡名は一覧表を参照



瑞泉寺周辺遺跡 (No.338)

二階堂字紅葉ヶ谷 674 番 1 地点

例 言

1. 本報は「瑞泉寺周辺遺跡 (No.338)」内の一部、二階堂字紅葉ヶ谷 674 番 1 地点 (略称 ZSS0521) おける個人住宅の建築 (鋼管杭の基礎構造) にともなう埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査期間：平成 17 (2004) 年 11 月 8 日～平成 18 (2005) 年 1 月 18 日 調査面積：56.00m²
3. 現地調査・整理作業の体制は以下の通りである。
調査担当者：原 廣志
調 査 員：須佐直子・太田美智子・赤堀祐子・梶岡溪音・須佐仁和・小野夏菜・中川建二
平山千絵・橋本和之・野崎美帆・山口正紀
協力機関名：鎌倉考古学研究所 (株) 齋藤建設
4. 整理作業及び本報の作成は以下の分担で行った。
遺物 実測：須佐 (直)・梶岡・原
挿図 作成：須佐 (直)・小野・原
遺物観察表：平山
遺構 写真：須佐 (仁)・原
遺物 写真：平山
原稿 執筆：第 1 章「遺跡の位置と歴史的環境」については松吉大樹氏 の原稿を掲載した。
第 2・3 章は原が執筆し、第 4 章については調査員協議のもと原が稿を草した。
5. 出土遺物、図面・写真などの発掘調査資料は、報告書刊行後に鎌倉市教育委員会が保管している。
6. 本報の凡例は、以下の通りである。
挿図 縮尺：全側図：1/80 遺構図：1/40 1/50 1/60 遺物図：1/3
使用 名称：本書で使用する用語のうち、「土丹 (どたん)」は逗子シルト岩の砂泥岩、「鎌倉石」は逗子市池子層に顕著な粗粒凝灰岩、「伊豆石」は相模川以西の河川・海浜に産する安山岩で礎石に利用可能な扁平な円礫を指し、表記を簡略化した。
遺 構 図：遺構の標高は海拔高の数値を示している。
遺 物 図：- - - - は塗薬の範囲を示し、黒塗りは灯明皿に付着した油煙煤を表現している。
7. 本遺跡の現地調査から本報作成に至るまで、以下の方々からご助言とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい (敬称略、五十音順)。
秋山哲雄・伊丹まどか・宇都洋平・押木弘己・小野正敏・金丸義一・河野眞知郎・菊川 泉・菊川英政・後藤 健・古田戸俊一・佐藤仁彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木庸一郎・玉林美男・塚本和宏・中田 英・中野晴久・根本志保・藤澤良祐・本澤慎輔・松尾宣方・松葉 崇・馬淵和雄・森 孝子

目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	5
1. 遺跡の位置	
2. 遺跡の歴史的環境	
第二章 調査の概要	9
1. 調査の経過	
2. 測量軸の設定	
3. 層序	
第三章 検出遺構と出土遺物	14
1. 第1面の遺構と遺物	
2. 第2面の遺構と遺物	
3. 第3面の遺構と遺物	
4. 第3面下の調査区南東トレンチ	
第四章 まとめ	35

挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺の遺跡	6	図11 第2面建物・溝	22
図2 国土座標とグリット設定図	10	図12 第2面建物1・2内、遺構外出土遺物	23
図3 調査区西壁・東壁土層断面図	12	図13 第2面建物3内出土遺物	24
図4 第1面遺構全測図	14	図14 第3面全測図	24
図5 第1面土坑・ピット	15	図15 第3面建物4・溝2	25
図6 第1面ピット	16	図16 第3面土坑・ピット	26
図7 第1面遺構・遺構外出土遺物	18	図17 第3面遺構・遺構外出土遺物	27
図8 第2面遺構全測図	19	図18 第3面下調査区南東トレンチ	29
図9 第2面建物1・2、溝1	20	図19 近隣調査地点対応図	36
図10 第2面建物3	21		

表 目 次

表1 遺物観察表(1)	30	表4 遺物観察表(4)	33
表2 遺物観察表(2)	31	表5 遺物観察表(5)	34
表3 遺物観察表(3)	32	表6 遺物分類別出土数量・比率表	37

図 版 目 次

<p>図版 139</p> <p style="padding-left: 20px;">a. 第 1 面全景 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">b. 第 1 面全景 (東から)</p> <p style="padding-left: 20px;">c. 第 1 面土坑 1 (北から)</p> <p>図版 240</p> <p style="padding-left: 20px;">a. 土坑 3 (北から)</p> <p style="padding-left: 20px;">b. 土坑 4 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">c. 土坑 5 (西から)</p> <p style="padding-left: 20px;">d. P 18 (北から)</p> <p style="padding-left: 20px;">e. P 8、P 26 (西から)</p> <p style="padding-left: 20px;">f. 骨製品出土状況</p> <p>図版 341</p> <p style="padding-left: 20px;">a. 第 2 面全景 (東から)</p> <p style="padding-left: 20px;">b. 第 2 面全景 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">c. 第 2 面建物 1・2、溝 1 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">d. 建物 3 (東から)</p> <p>図版 442</p> <p style="padding-left: 20px;">a. 建物 1・2 (北から)</p> <p style="padding-left: 20px;">b. 建物 1-1・2-1 柱穴</p> <p style="padding-left: 20px;">c. 建物 1-2・2-2 柱穴</p> <p style="padding-left: 20px;">d. 建物 1-3・2-3 柱穴</p> <p style="padding-left: 20px;">e. 建物 3 検出状況 (北から)</p> <p style="padding-left: 20px;">f. 建物 3 検出状況 (南から)</p> <p>図版 543</p> <p style="padding-left: 20px;">a. 建物 3-イ 1 (東から)</p> <p style="padding-left: 20px;">b. 建物 3-イ 2 (東から)</p> <p style="padding-left: 20px;">c. 建物 3-ロ 1 (東から)</p> <p style="padding-left: 20px;">d. 建物 3-ロ 2 (東から)</p> <p style="padding-left: 20px;">e. 建物 3 中央礎板列 (西から)</p> <p style="padding-left: 20px;">f. 建物 3 北側礎板列 (西から)</p> <p>図版 644</p> <p style="padding-left: 20px;">a. 溝 1 完掘状況 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">b. 溝 1 完掘状況 (北から)</p> <p style="padding-left: 20px;">c. 溝 1 炭化物層検出状況 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">d. 溝 1 石組検出状況 (西から)</p>	<p style="padding-left: 20px;">e. 銅製品出土状況</p> <p style="padding-left: 20px;">f. 銅製品出土状況</p> <p style="padding-left: 20px;">g. 骨製品出土状況</p> <p>図版 745</p> <p style="padding-left: 20px;">a. 第 3 面全景 (東から)</p> <p style="padding-left: 20px;">b. 第 3 面全景 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">c. 調査区西側遺構群 (西から)</p> <p>図版 846</p> <p style="padding-left: 20px;">a. 調査区北西域遺構群 (西から)</p> <p style="padding-left: 20px;">b. 建物 1、溝 1 (北から)</p> <p style="padding-left: 20px;">c. 建物 1 イー 1 (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">d. 建物 1 イー 2 (西から)</p> <p style="padding-left: 20px;">e. 建物 1 イー 3、柱穴 (西から)</p> <p style="padding-left: 20px;">f. 建物 1 イー 4 (西から)</p> <p style="padding-left: 20px;">g. 土坑 1 (東から)</p> <p style="padding-left: 20px;">h. 土坑 4 (南から)</p> <p>図版 947</p> <p style="padding-left: 20px;">a. 調査区南東隅トレンチ (南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">b. 同左東部分</p> <p style="padding-left: 20px;">c. 西壁土層堆積</p> <p style="padding-left: 20px;">d. 西壁北側土層堆積</p> <p style="padding-left: 20px;">e. 西壁中央土層堆積</p> <p style="padding-left: 20px;">f. 西壁南側土層堆積</p> <p style="padding-left: 20px;">g. 東壁土層堆積</p> <p style="padding-left: 20px;">h. 北壁溝 1 土層堆積</p> <p>図版 1048</p> <p style="padding-left: 40px;">第 1 面・第 2 面遺構出土遺物 (1)</p> <p>図版 1149</p> <p style="padding-left: 40px;">第 2 面遺構出土遺物 (2)</p> <p>図版 1250</p> <p style="padding-left: 40px;">第 2 面遺構出土遺物 (3)</p> <p>図版 1351</p> <p style="padding-left: 40px;">第 2 面・第 3 面遺構出土遺物 (4)</p>
--	---

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

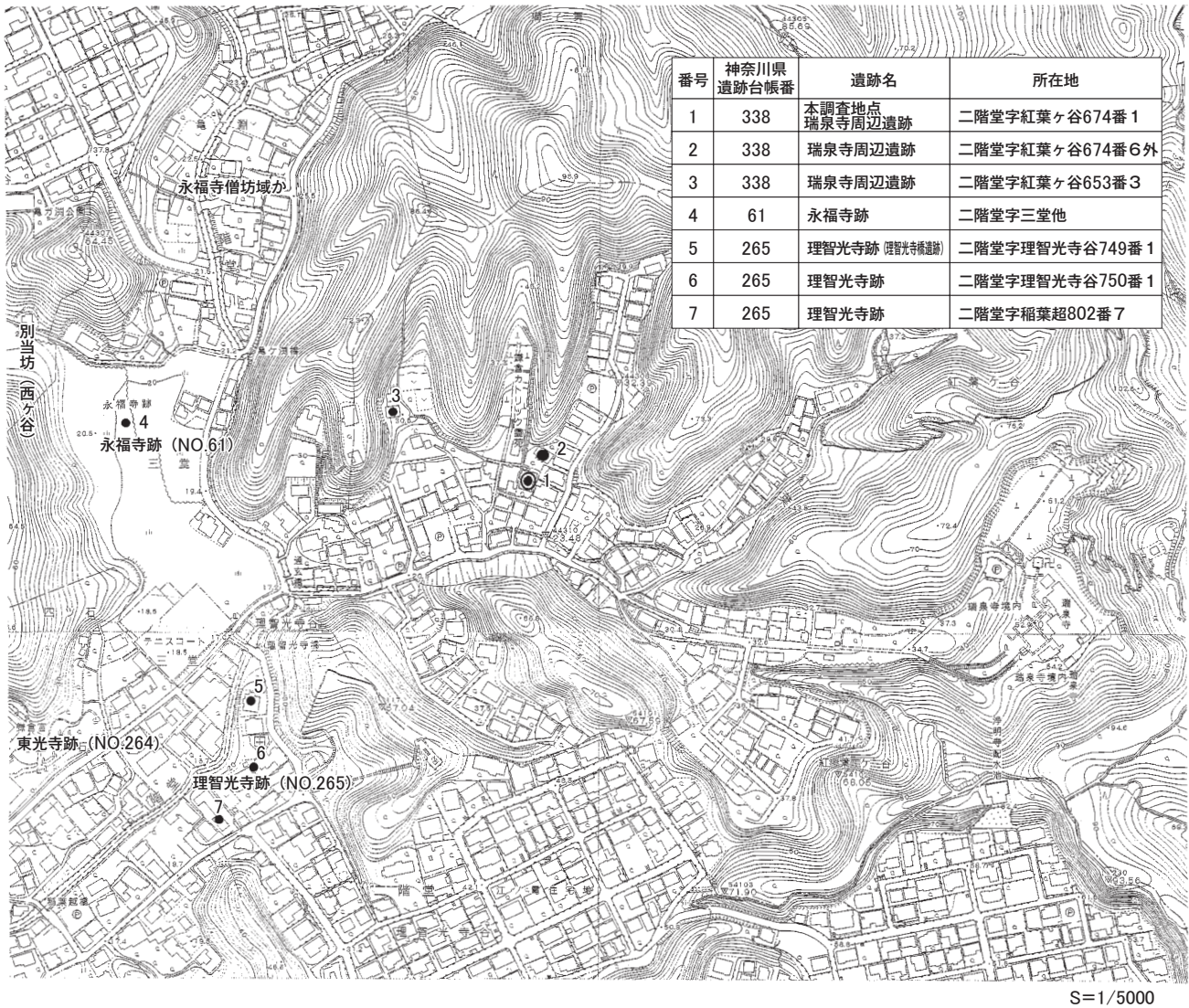
調査地点のある瑞泉寺周辺遺跡は、鎌倉市街地の北東域にあたり、JR横須賀線鎌倉駅の東北方向へ直線距離にして約2.1 kmの位置にあり、鎌倉市二階堂紅葉ヶ谷674番1に所在している(第1図)。この周辺は二階堂川を中心にして谷戸が多方向に形成され、尾根筋も複雑に入り組んでいる。調査地点の谷戸は二階堂川の左岸、紅葉ヶ谷と呼称される一支谷に位置しており、谷戸の開口部は二階堂川に架かる通玄橋から始まっている。谷戸は単一ではなく樹木の枝状に入り組んだいくつかの小支谷を構成した地形を呈しており、谷奥に現在もひっそりとした佇まいをみせる国指定史跡の錦屏山瑞泉寺までの間、東西方向に伸びた谷筋を形成している。この辺の丘陵基盤は第三紀後期中新生～前期鮮新世にかけての堆積層であり、三浦層群に属する逗子シルト岩層と呼ばれている。

ところで、二階堂川右岸には明治2年(1869)創建の鎌倉宮(大塔宮)と、その東側に近接した尾根上には護良親王の墓と伝える石塔が存在している。また周辺には既に廃寺となっているが、鎌倉宮の地は東光寺の旧跡と伝えられる。その西側に残る小字名の「四つ石」は永福寺惣門(四脚門か)が予想され、さらに二階堂川上流の亀ヶ淵・杉ヶ谷までの広い平坦地には「二階堂」(字名三堂や光堂)の地名に由来する源頼朝御願寺の永福寺が、南西方の支谷(理智光寺ヶ谷)には理智光寺がそれぞれ存在していた。

2. 遺跡の歴史的環境

瑞泉寺のある紅葉ヶ谷に関する史料は少ない。元徳2年(1330)三月四日付に推定される金沢貞顕書状に「一太閤禅閣去廿五日、石長老の二階堂紅葉谷の庵へにハかに入御」とあり(註1)、北条高時が紅葉谷にあった夢窓疎石の庵を訪れているが、「梶谷を当時紅葉谷申候也」と注されていることから梶谷(杉ヶ谷)との関連性も無視できない。永仁2年(1294)六月十五日付定聖願文に「於南閻浮提大□□国相模国鎌倉二階堂梶谷勝福寺書写畢、東寺流持金剛権律師定聖(花押)」とあり(註2)、二階堂杉ヶ谷に勝福寺なる寺が存在していたことが知られる。しかし年代未詳(元弘2年カ)六月廿三日付理覚書状(註3)に「御礼承候了、自杉谷未承候、蒙仰事候ハ、不可有疎略之儀候」と元徳二年三月以降の史料にまだ「杉谷」の地名が使用されていることが見てとれるので、一概に紅葉ヶ谷と杉ヶ谷を結びつけることはできない。また現在の杉ヶ谷は永福寺中心伽藍奥の亀ヶ淵よりもっと北に入ってしまったところであり、紅葉ヶ谷とはかなり距離がある。現在の二階堂杉ヶ谷、紅葉ヶ谷を史料の地に当たるかどうかは未詳とせざるを得ない。

瑞泉寺は、錦屏山と号し、臨済宗円覚寺派の浄刹である。『和漢禅刹次第』によれば、五山に次ぐ官寺としての寺格を定めた関東十刹に列したとされる。嘉暦2年(1327)、二階堂南芳庵に住していた夢窓疎石を開山、二階堂道蘊(貞藤)を開基として現在の寺地に瑞泉院が創建され、翌年には観音殿が建てられている。以下『新編相模国風土記稿』所載の寺伝によると、中興開基は初代鎌倉公方の足利基氏で、当寺号にちなみ瑞泉寺殿玉巖道希との法名を持つ。境内は往昔より景勝の地として知られ、鎌倉公方家をはじめとして武士の尊崇をあつめていた。旧境内の塔頭には南芳庵、果証院(尊氏の母、上杉氏塔所)、勝光院(満兼塔所)、長春院(持氏塔所)、祥雲庵、羅漢院、三聖院、妙智院、証悟院、吉祥院、西芳院、東禅院の12院が伝えられるとされ、後に保寿院(基氏の母、清江禅尼塔所)と永安寺(氏満塔所)が塔頭となったとされている。また、これ以外にも永亨5年(1433)に示寂した朴中梵



S=1/5000

図1 調査地点と周辺の遺跡

淳の塔所として「瑞泉景福庵」の名が見える。貞治元年(1367)二代將軍足利義詮が住持通叟和尚と当寺で詩作している。基氏の子氏満もしばしば参詣して観花の詩会を開いている。康暦元年(1379)氏満謀反の噂が広がるが、住職の古天周誓が將軍足利義満の帰依をうけていたため、反心なき旨を記した告文を持たせて京都に送り事なきを得られている(註4)。康暦元年に五山準十刹となり(註5)、次いで至徳三年(1386)には関東十刹の首位に列せられたとされる(註6)。これは、夢窓の法嗣である義堂周信が永享十一年(1439)二月十一日、永享の乱で敗北した足利持氏は瑞泉寺塔頭の氏満墓所永安寺において自害する(註7)。この時、住僧であった昌在西堂は持氏の子永寿丸を連れ甲斐国に逃げかくまった。のちに永寿丸が成氏と称して古河公方となると、その恩に報い毎年2月に当寺参詣を行い(註8)、古河公方の例格の一つに定めた(註9)。最盛期の室町時代前期には永安寺以下の塔頭を持ち興隆するが、戦国期に入ると主な外護者の没落により荒廃を招いた。慶長八年(1603)八月、円覚寺西堂の雲如梵意(佛日庵主)が住持として入寺以降、円覚寺の末寺となる。境内は国史跡に指定され、本堂裏手の夢窓築造と伝える庭園は国名勝となっている。背後の錦屏山頂に建てられた一字(遍界一覽亭)は嘉暦三年(1328)に夢窓が建立して以来、屢々名僧を会して詩会が催され、池庭園についてもおそらくこの時期に築造されたと考えられる。

元禄2年(1689)には、徳川光圀が『新編鎌倉志』を編むにあたり、瑞泉寺に上山している。光圀は荒廃していた一覽亭を復興再建して千手観世音菩薩像(市指定有形文化財)を安置したとされる。ま

た永享年間(1429～40) 建立とされる惣門は、江戸時代建立の本堂(仏殿)や庫裡とともに、大正12年(1923)の関東大震災により全潰している。本堂の背後にある池庭は、昭和44・45年(1969・70)に復元を目的として発掘調査が実施され、夢窓疎石が作庭したと推定される地形と岩盤の美しさをよく活かした庭姿を残している。また裏山には「お塔やぐら」「瑞泉寺やぐら群」がある。

なお本遺跡周辺の武家屋敷としては、『吾妻鏡』に二階堂行政・行村親子が二階堂に邸宅を構えていたとある(註10)が場所については未詳で二階堂氏以外の史料は管見の限り確認できない。

次に発掘調査事例についてみると、本調査地点から西へ一つ谷を挟んだ永福寺側の谷戸になる地点3で発掘調査が行われている(註11)。報告書によると14世紀前葉頃の土地利用で、山裾を削った土・岩塊で前面の傾斜地を埋め立てして平坦地を造成した谷戸開発の形態はみられたが、建物遺構などの痕跡は発見されていない。地点2から13世紀後葉～15世紀前半にかけての様相を示した遺物に伴って3時期の生活面(地形面)から礎石建物・土坑・ピットなど共に検出された。遺物は多量のかわらけの他、青磁算木文香炉、瀬戸天目茶碗、瓦質香炉、瓦質土風呂、木製品(箸・折敷等)などの遺物組成がみられたことから寺社塔頭や武家屋敷などの一部の可能性も考えられる(註13)。

先述したが鎌倉幕府滅亡以後も、瑞泉寺は鎌倉公方家などの外護により大いに隆盛した。同じ紅葉ヶ谷に立地する本調査地点も含めた事例は何らかの関わりを持った地域だったかもしれない(例えば瑞泉寺の塔頭)。また浄妙寺周辺に鎌倉公方や上杉氏の屋敷が置かれていたと考えられることから(註12)、それに勤仕する御家人連中の家々も浄妙寺周辺に多く建てられていたであろう。浄妙寺と瑞泉寺は裏山を超えればそう遠くなく(註14)、瑞泉寺周辺の谷戸内でもその影響が及んでいた可能性は否定できないと考えられる。

【註】

1. (元徳二年)三月四日金沢貞顕書状(金沢文庫文書『神奈川県史』資料編2 古代・中世2844 文書)
2. 永仁二年六月十五日定聖願文(相模寶金剛寺文書『神奈川県史』資料編2 古代・中世1157 文書)
3. 年未詳六月廿三日理覚書状(『鎌倉遺文』41、3042号文書)
4. 「鎌倉大草紙」(『群書類従』第二十輯 合戦部)
5. 玉村竹二校「扶桑五山記」(『鎌倉市文化財資料』第2集)
6. 「鎌倉五山記」(続『群書類従』第二十七輯下 釈家部)
7. 「鎌倉大草紙」(『群書類従』第二十輯 合戦部)
8. 『新編相模国風土記稿』(鎌倉郡二二 瑞泉寺項)
9. 「殿中以下年中行事」(『群書類従』第二十二輯 武家部)
10. 『吾妻鏡』建久三年八月廿四日条、同建久三年九月十一日条、同元仁元年正月四日条、等。
11. 神山晶子・福田 誠「瑞泉寺周辺遺跡(No.338) 二階堂字紅葉ヶ谷 653番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告15』(鎌倉市教育委員会1999)
12. 山田邦明「室町時代の鎌倉」五味文彦編『都市の中世』(吉川弘文館1992)
13. 松吉大樹・原 廣志「瑞泉寺周辺遺跡(No.338) 二階堂字紅葉ヶ谷 647番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告25(第2分冊)』(鎌倉市教育委員会2009)
14. 浄妙寺東側の胡桃ヶ谷にあったと考えられている大楽寺(廃寺)は、永享元年(1429)二月十一日の永安寺炎上に際し類焼している(「鎌倉大日記」『増補続史料大成』51)。瑞泉寺塔頭永安寺の裏山を超えたところが胡桃ヶ谷であったことからしても、瑞泉寺と浄妙寺の位置関係の近さが窺われる。

【参考文献】

- 秋山哲雄 2006『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館
- 秋山哲雄 2013『鎌倉幕府滅亡と北条氏一族』(敗者の日本史7) 吉川弘文館
- 上本進二 2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子棧敷戸遺跡(逗子市No.100)』東国歴史考古学研究所
- 鎌倉国宝館 1995「鎌倉の古絵図Ⅲ」『鎌倉国宝館図録』第十五集(再販) 鎌倉市教育委員会
- 白井永二編 1986『鎌倉事典』東京堂出版
- 宗臺秀明・宗臺富貴子 1996『横小路周辺遺跡発掘調査報告書 二階堂字横小路110-3地点 一永福寺関連遺跡の調査一』同遺跡発掘調査団
- 貫 達人・川副武胤 1979『鎌倉市史 社寺編』鎌倉市史編纂委員会 吉川弘文館
- 馬淵和雄 1992「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉』第69号 鎌倉文化研究会

第二章 調査の概要

1. 調査の経過

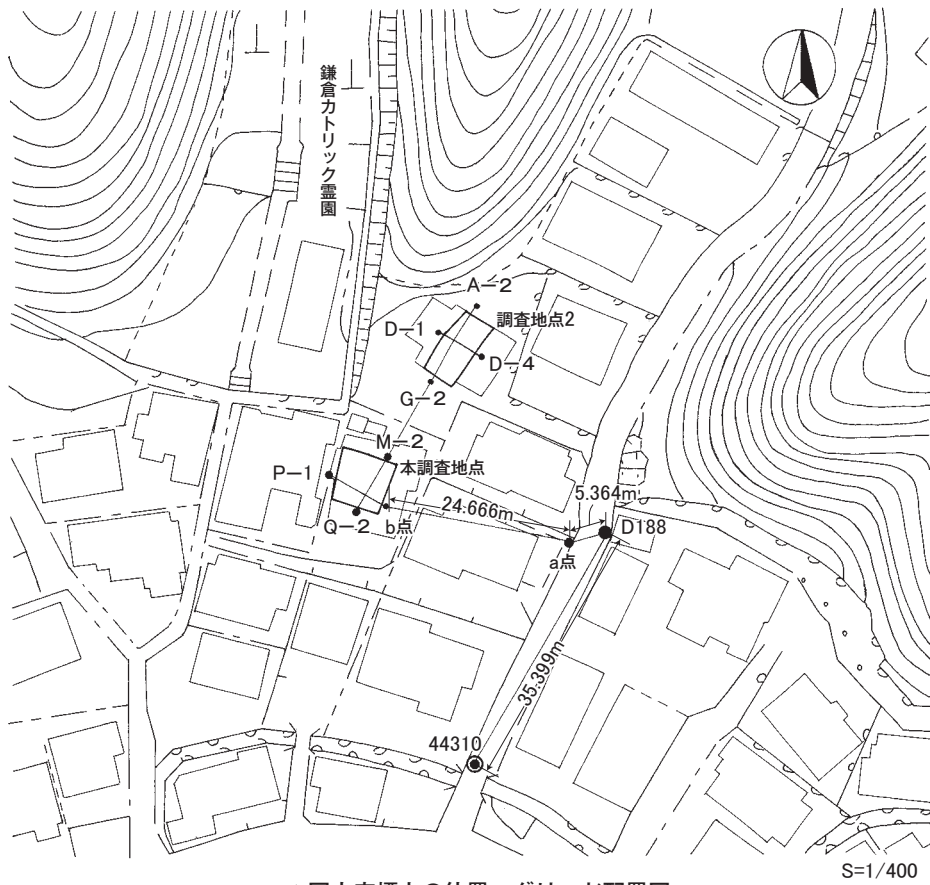
本遺跡は鎌倉市街地北東部、県道金沢鎌倉線（金沢街道）の「分れ路」から鎌倉宮方面へ約800 m入った紅葉ヶ谷に位置し、谷戸奥には夢窓疎石作庭の禅宗寺院庭園で有名な国史跡瑞泉寺がある。調査地点は谷戸開口部に近い鎌倉市二階堂字紅葉ヶ谷674番1に所在している。

今回の発掘調査は、鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅建設の計画があったため、工事の実施により掘削深度の関係から埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れのある事が予想された。このために鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地下40cm前後まで現代の客土や水田耕土が確認され、その直下から中世遺物包含層を挟んで深さ約1mの間に少なくとも3時期の遺構面（生活面）と、それに伴う遺物が出土して具体的な埋蔵文化財の存在することが判明した。これにより当該建築工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。このため事業者との協議を行ったところ、当初の計画に基づき建築工事を実施したいとの意向が示された。そこで文化財保護法に基づく届け出手続きを行い、施工者と調査方法・工程の協議を重ねた結果、平成17年11月8日から約2ヶ月半の予定で発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は11月8日に機材搬入し、試掘確認の結果に基づいて遺構面を傷つけないように地表40cm程までを重機で除去した後、それ以下を人力により掘り下げて遺構の確認・検出を行なった。調査面積は56.00㎡が対象である。調査の結果、礎石・掘立柱建物、土坑、溝、ピットなどにより構成された遺構群が検出された。出土遺物は多量のかかわり始め、陶磁器類、金属・骨角製品など13世紀後葉～15世紀前半頃の所産である。平成18年1月18日までの間に必要な記録作業を行い、同日に機材撤収して現地調査を終了した。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

日誌抄

- 11月8日（火） 現地調査を開始。調査区を設定して地表下60cmまで重機により表土掘削を実施。機材搬入とテント設営を行う。
- 9日（水） 市4級基準点を基に測量軸方眼の設定を行い、測量用の海拔高は鎌倉市が設置した3級水準点から敷地内に原点レベルを移動。
- 10日（木） 第1面の遺構検出作業を開始し、調査区壁直下に排水溝の開削作業を行う。
- 21日（月） 第1面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影及び平面図の作成。
- 12月12日（月） 荒掘り作業を終了した後、第2面の地形面出し精査と遺構確認の作業を開始。
- 14日（水） 第2面の遺構確認の作業を継続。面上検出の銅製品・溝1上層の写真撮影を行う。
- 21日（水） 掘立柱建物の新旧2軒を検出、溝1の掘り下げ作業を実施。
- 22日（木） 溝1東側で建物3を確認、柱穴掘り方や床束礎板の検出を行う。
- 1月5日（木） 第2面の調査終了。全景及び建物・溝などの個別遺構の写真撮影。第3面検出に向けての掘り下げと遺構確認を開始。
- 13日（金） 第3面の調査終了。全景及び建物・溝などの個別遺構の写真撮影。
- 16日（月） 第3面下トレンチの調査。調査区西壁・東壁一部土層堆積の断面図を作成。
- 18日（水） 現地調査終了。調査関係各方面に発掘調査終了の旨を連絡して機材撤収。



▲国土座標上の位置・グリッド配置図
▼調査地点周辺地図

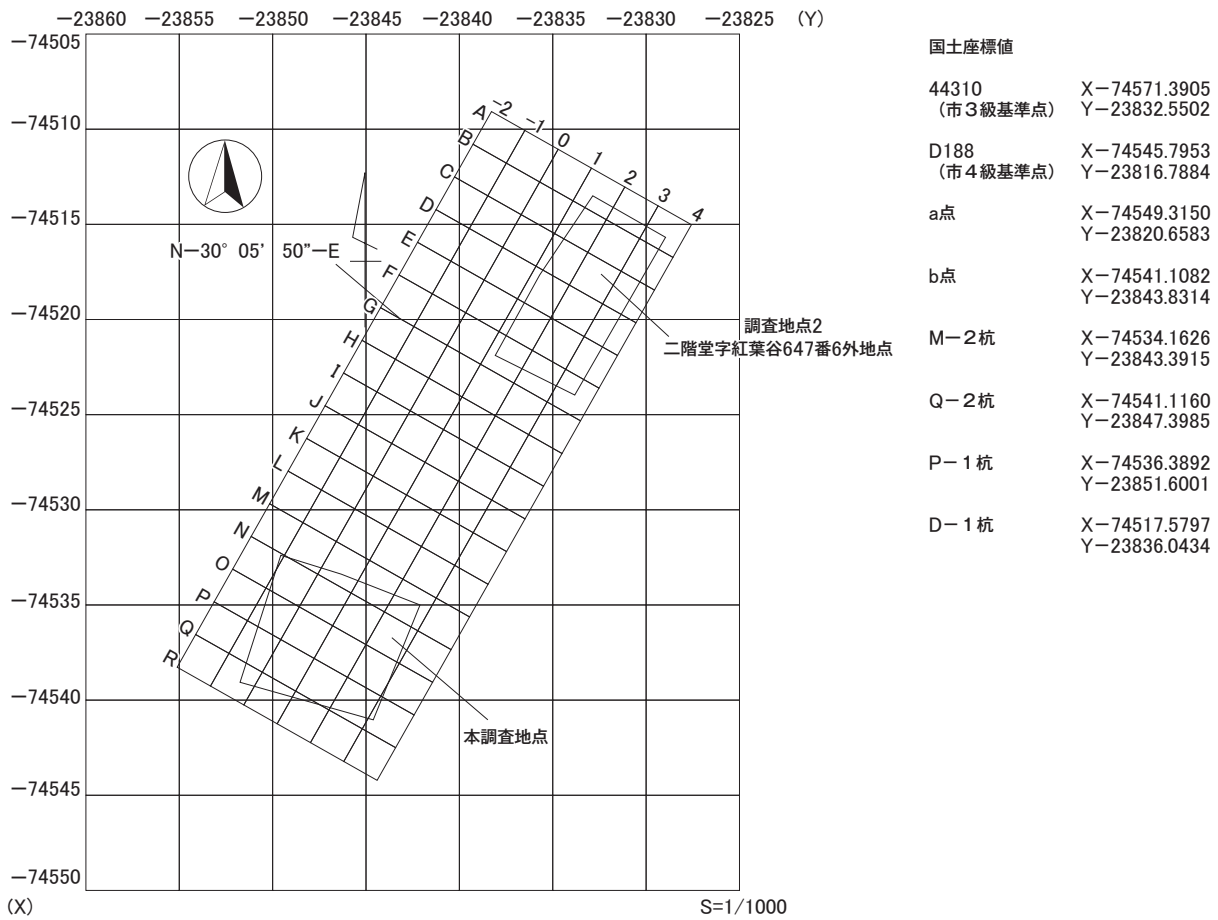


図2 国土座標とグリッド設定図

2. 測量軸の設定

調査にあたって使用した測量方眼軸の設定には、図2で示したのように国土座標の数値（世界測地系第IV系）を用いている。また本調査地点の北側で平成15年度に発掘調査を実施した地点2（松吉・原 2008）とは近接した位置であり、同じ敷地内で関連した遺構も予想されたので測量方眼を統一して設定することにした。したがって調査区の軸方位と、方眼軸が振れているのはそのためである。鎌倉市道路管理課が設置した市3級基準点44310と、市4級基準点D188を採用している。この基準点の2点（日本測地系第IV座標系）の関係から開放トラバース側量によって算出した仮原点a・b点を設けた。さらに測量方眼軸の基準点にあたるM-2杭と、Q-2杭をそれぞれ設置した。さらに側量軸は東西軸と南北軸を2m方眼による軸線を配し、南北軸はM～Rのアルファベットの名称、東西軸に-2～4の算用数字をそれぞれ付して設定を行った。

現地調査で使用した国土座標は、日本測地系（座標AREA9）の国土座標数値であったため、報告書の整理作業段階で、国土地理院が公開する座標変換ソフト『webTKY2JGD』によって世界測地系第IX系の座標数値に訂正したのが下記の数値である。

44310 : [X - 74571.3905 Y - 23832.5502] M - 2杭 : [X - 74534.1626 Y - 23843.3915]

D 188 : [X - 74545.7953 Y - 23832.7884] Q - 2杭 : [X - 74541.1160 Y - 23847.3985]

従って、調査地点は世界測地系第IV系のX - 74530.00 ~ 74545.00 Y - 23855.00 ~ 23840.00の国土座標区画内に位置している。挿図中の方位は、すべて真北を採用した。測量方眼の南北軸線は遺構の方位を意識して調査区の南北軸にほぼ平行した主軸としたので真北より東に触れている。また調査地点の経緯度は以下のとおりである。

南北軸線 : [N - 30° 05' 50" - E]

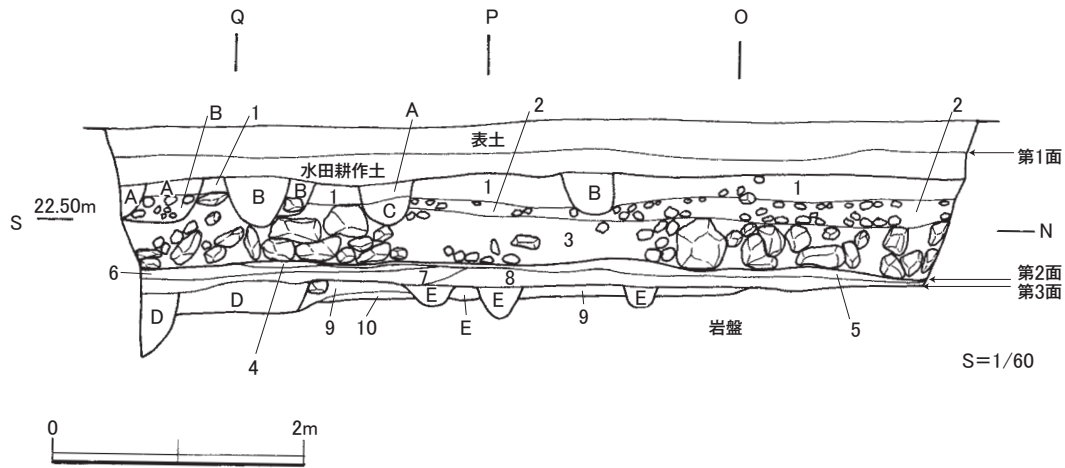
調査地点 : [東経 139° 34' 29"] [北緯 35° 19' 28"]

調査中に使用した海拔高は、調査地点から西方200m程に位置する国史跡永福寺跡の測量基準点を採用した。昭和63年に史跡地内に設置された基準点No.3 (X - 74604.081 Y - 24031.090 L = 18.227 m) から海拔標高原点として調査地内のM - 2杭上 (L=23.420m) と、D - 3杭上 (L=23.305m) へ仮水準点を移設した。本報の文章中または挿図に記載されたレベル数値は、すべてこれを基準にした海拔標高を示している。

3. 層序

本遺跡の所在する紅葉ヶ谷は西端が二階堂川に架かる通玄橋から始まり、谷戸地形は単一ではなく樹枝状に入り組んだいくつかの支谷を構成した地形を呈している。調査地点は紅葉ヶ谷中央部の瑞泉寺へ向かう道筋の北側で、南北に伸びた小支谷の開口部に位置しており、現地表の海拔高23.40m前後を計り、ほぼ平坦な宅地を形成している。鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査の結果を基に、現地表下約30cmまで堆積していた近・現代の客土や耕作土を重機で除去した後、中世遺構の確認を実施した。

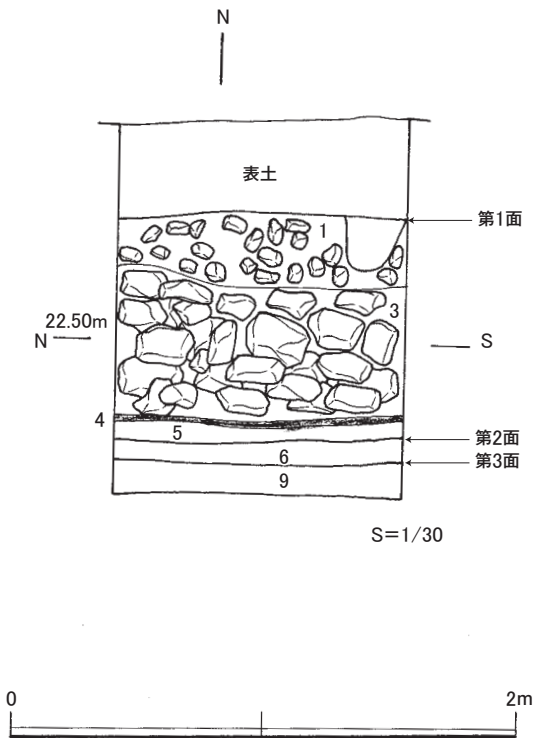
調査区各壁面の土層堆積は遺構覆土を除くと、表土・耕作土以下が1層の遺物包含層から中世地山上面（中世基盤層＝北から削平岩盤、青灰色粘質土、黒褐色粘質土により構成土）まで概ね10層に区分され、少なくとも3時期の生活面が確認された。調査区西壁土層堆積と、東壁一部の土層堆積は図3に示したとおりである。表土や耕作土の堆積土を除去すると、締りのある暗茶褐色弱粘質土の1層が観察された。この層は概ね5cm～拳大の土丹小塊を破碎したものを混入した地形層で、これを第1面として調査を行った。この面は海拔高22.75～22.90 mであり、遺構は土坑12基、ピット98口などを検出した。



▲調査区西壁土層堆積

調査区西壁・東壁土層注記

1. 暗茶褐色弱粘質土 土丹粒、片多量に含む、かわらけ片少量含む
しまり有り 粘性弱い
2. 暗茶褐色弱粘質土 土丹粒、片多量に含む、かわらけ片、炭化物少量含む
しまり有り 粘性弱い
3. 茶褐色弱粘質土 拳大～人頭大土丹多量に含む
しまり無し 粘性弱い
4. 炭化物層
5. 暗茶褐色粘質土 混入物ほとんど見られない粘土層
ややしまり有り 粘性強い
6. 青灰色粘質土 土丹粒多量に含む、しまり有り 粘性強い
7. 暗茶褐色粘質土 土丹粒少量含む、ややしまり有り 粘性強い
8. 青灰色弱粘質土 土丹粒多量に含む、しまり有り 粘性弱い
9. 青灰色粘質土 黒褐色粘質土を一部含む
しまり有り、粘性強い 中世地山
10. 黒褐色粘質土 土丹粒少量含むが混入物ほとんど見られない
しまり有り、粘性強い
- A. 暗茶褐色弱粘質土 土丹粒少量含む しまり無し
- B. 暗茶褐色粘質土 土丹粒・塊多量に含む、かわらけ片・炭化物少量含む
ややしまり有り
- C. 茶褐色粘質土 土丹粒・かわらけ片・炭化物少量含む
ややしまり有り
- D. 黒褐色弱粘質土 土丹粒多量、土丹塊少量含む、砂っぽい、しまり無し
- E. 黒灰色弱粘質土 土丹粒多量に含む、ややしまり有り



▲調査区東壁土層堆積

図3 調査区西壁・東壁土層断面図

第1面を構成する地形層と、第2層の厚さ20～30cmの暗茶褐色弱粘質土を除去すると、その下の堆積土は40～60cmほどの厚さで拳大から頭大の大小土丹塊を多量に混入した締りのない茶褐色土(3層)の大造成による整地層が顔を覗かせ、その海拔高22.70m前後であった。この厚い整地層は北隣に位置した地点2(二階堂字紅葉谷647番6外地点)の調査において第1面の構築に伴う造成層と類似するもので、海拔高23.20m前後で確認された。両地点の整地層上面は比高差が50cm程で現況の北から南へと傾斜する谷戸地形からみても同じ時期の造成によるものと考えられる。

第2面は4層の炭化物層や5層の暗茶褐色粘質土の堆積土を挟んで海拔高22.10m前後である。この面は概ね3～5cm角の小土丹粒を混入した粘性の強いしまりのある暗青灰色土による地形層である。この面に伴う遺構は南北溝(溝1)を挟んだ東西域に建物跡3軒(西が建物1・2、東が建物3)を検出している。薄い地形層の第2面構成土を除去すると、7層の粘性が強い暗茶褐色粘質土と土丹粒を多量に混入した青灰色弱粘質土の薄い堆積が認められ、その下は中世基盤層であった。中世基盤層を構成しているのは調査区の北端域が岩盤削平面、南側が黒褐色粘質土ブロックを含む暗青灰色粘質土の中世地山で第3面として調査を実施した。遺構は礎石建物1軒、土坑4基、溝6条、ピット15口などが検出され、面の海拔高は22.10m前後である。

さらに第3面の調査終了後に掘り残し遺構や岩盤削平面の様相を把握する目的で調査区南東隅にトレンチを設定して確認調査を実施した。その結果、岩盤の海拔高は南端約21.85m、北端約21.60mと緩やかに南へ傾斜しており、遺構は岩盤を掘り込んだ土坑、溝状遺構、ピットなどを検出することができた。

第三章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構と遺物

第1面を構成する地形層と、第2層の厚さ20～30cmの暗茶褐色弱粘質土を除去すると、その下の堆積土は40～60cmほどの厚さで拳大から頭大の大小土丹塊を多量に混じえた締りのない茶褐色土(3層)の大造成による整地層が顔を覗かせ、その海拔高22.70m前後であった。この厚い整地層は、先年報告した北隣に位置した地点2(二階堂字紅葉谷647番6外地点)の調査において第1面の構築に伴う造成土と類似するもので、その海拔高は23.20m前後で確認された。両地点の整地層上面の比高差を比較すると、本調査地点より50cm程高い地形を呈しているが、現況で観察した北から南へと傾斜する地形からみても同じ時期の造成と考えられる。検出遺構は土坑10基、ピット約80口などがあり、それに伴う遺物には図7に示したかわらけ大小皿、青磁・白磁の貿易陶磁器、国産陶器は瀬戸・常滑窯製品などが出土した。

a. 土坑(図4・5・7)

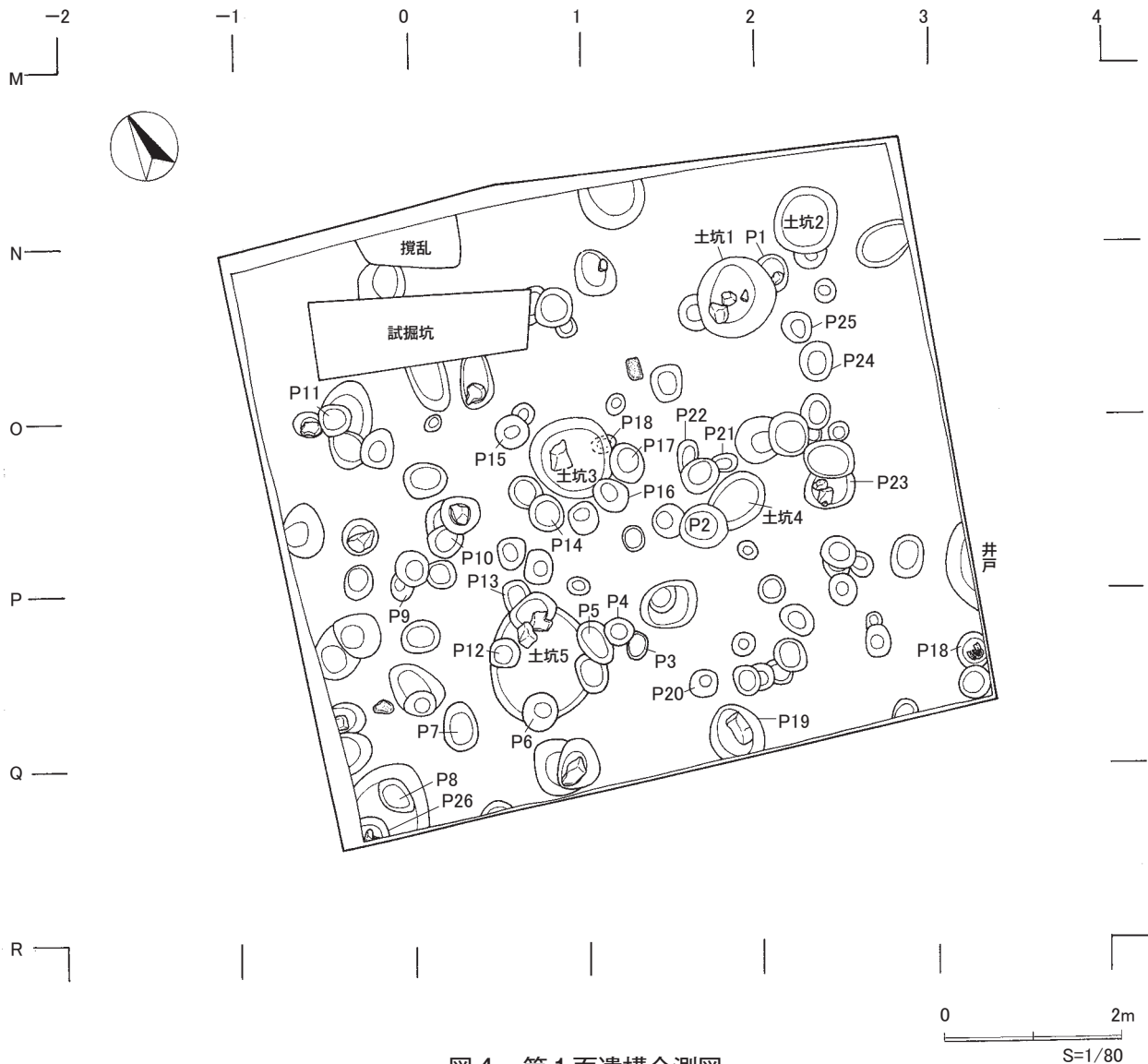
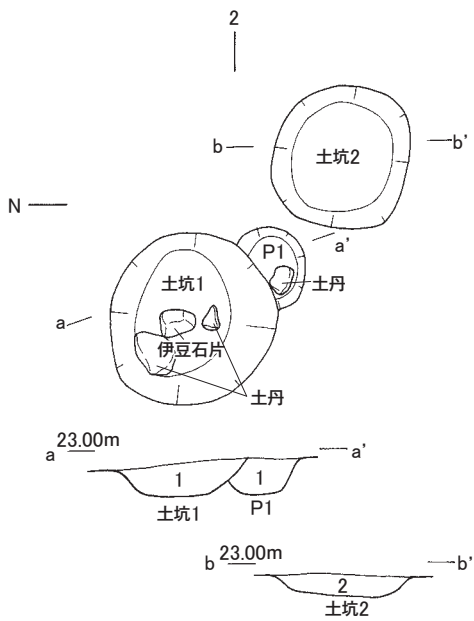


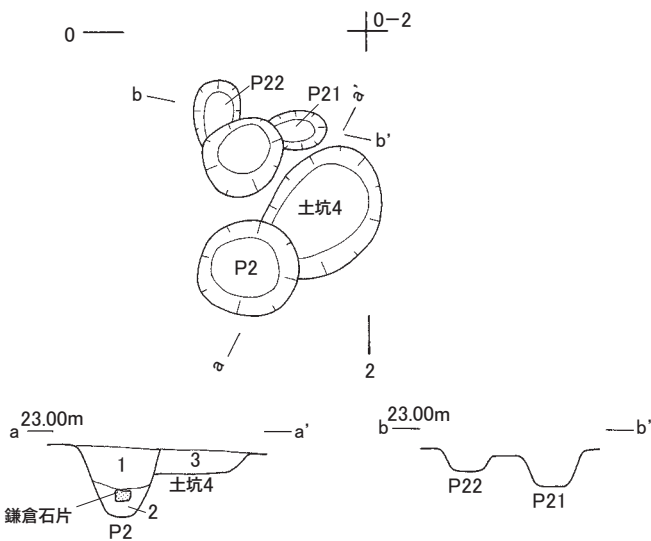
図4 第1面遺構全測図



土坑1・2 P1土層注記

1. 暗茶褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・1cm角土丹
2. 暗茶褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・1cm角土丹
やや多し しまり無し

▲土坑1・2 P1



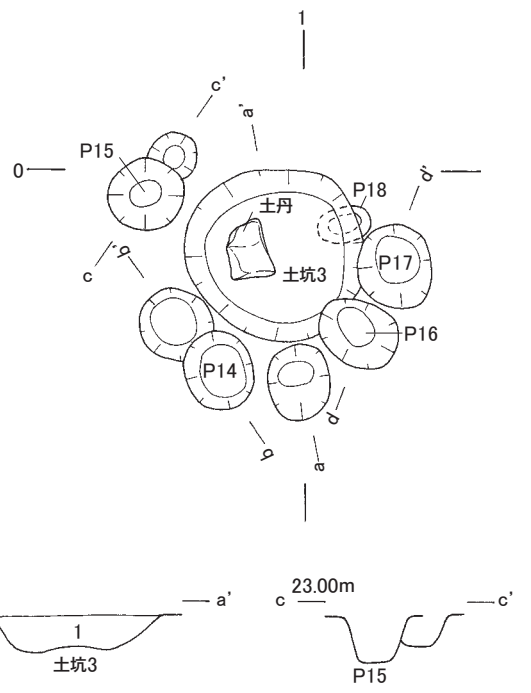
土坑4・P2 土層注記

1. 暗茶褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・1cm角土丹やや多し しまり無し
2. 茶褐色粘質土 土丹角・炭化物少量 粘性強い
3. 茶褐色粘質土 炭化物・かわらけ片少量 3cm角土丹まばら 粘性やや強い

土坑5・P3~5・12土層注記

1. 暗茶褐色粘質土 かわらけ片・炭化物多し 上層に大型土丹塊あり
2. 茶褐色粘質土 かわらけ片・炭化物少量 土丹粒やや多し
3. 暗茶褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・土丹粒多し
4. 暗茶褐色粘質土 かわらけ片・炭化物やや多し・5cm角土丹まばら
5. 暗茶褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・土丹粒多し

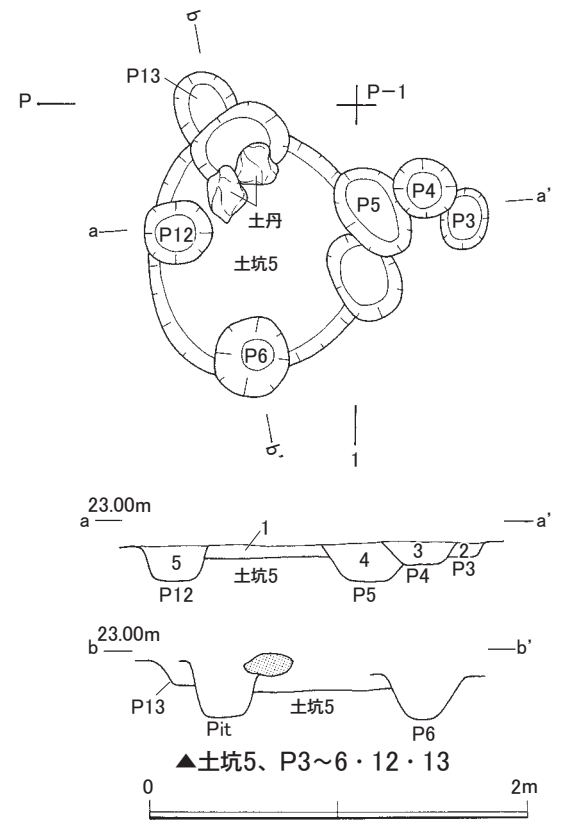
▲土坑4、P2・21・22



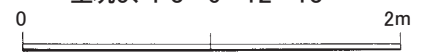
土坑3 土層注記

1. 暗茶褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・1cm角土丹やや多し
しまり無し

▲土坑3 P14~18



▲土坑5、P3~6・12・13



S=1/40

図5 第1面土坑・ピット

土坑1：調査区北東隅で検出され、P1と重複関係にあり本土坑が新しい。検出面の海拔高約22.90 mである。平面形状は楕円形を呈し、大きさは長径95cm、短径85cm、確認面からの深さ20cmで掘り方は浅く底面が皿状の断面形を呈する。覆土は土丹粒やかかわらけ小片を多量に含み、粘性を有した暗茶褐色土単一層の堆積が認められた。底面近くからは15～25cm大の土丹塊と伊豆石が合わせて3個検出した。遺物は図7-1～3のロクロ成形のかかわらけ小皿、高めの器形で開き気味に立ち上がる器壁を有している。

土坑2：N-2杭の東隣に位置し、検出面の海拔高22.94 mである。掘り方の形状は隅丸方形を呈し、径75cm前後、深さ15cm、断面が浅い皿状を呈している。覆土は締まりのない暗茶褐色粘質土でかわらけ片・炭化物・土丹粒をやや多く含むが、良好な遺物の出土はみられなかった。

土坑3：調査区中央、O-1杭に近接した位置でP16・17に一部削平を受けて検出された。検出面の海拔高22.96mである。掘り方の形状は円形を呈し、規模は径95cm前後、深さ20cm、底面は中央部がやや浅くなった形状の掘り方である。覆土はかわらけ片・土丹粒・炭化物をやや多く含む締まりのない暗茶褐色粘質土、出土遺物は4が口径6.4cmと小径のロクロかわらけ、5が瀬戸天目茶碗が出土した。

土坑4：O～P-2ラインに近接した位置で検出、P2に西端を掘削されていた。検出面の海拔高29.90m前後である。平面形状は楕円形を呈し、大きさは長径75cm以上、短径56cm、深さ15cmと浅く平坦な底面である。出土遺物はかわらけ細片が少量だけであり、図示できる資料はない。

土坑5：P-1杭近接した位置で、P5・6・12などに掘削され検出した。検出面の海拔高29.95m前後である。

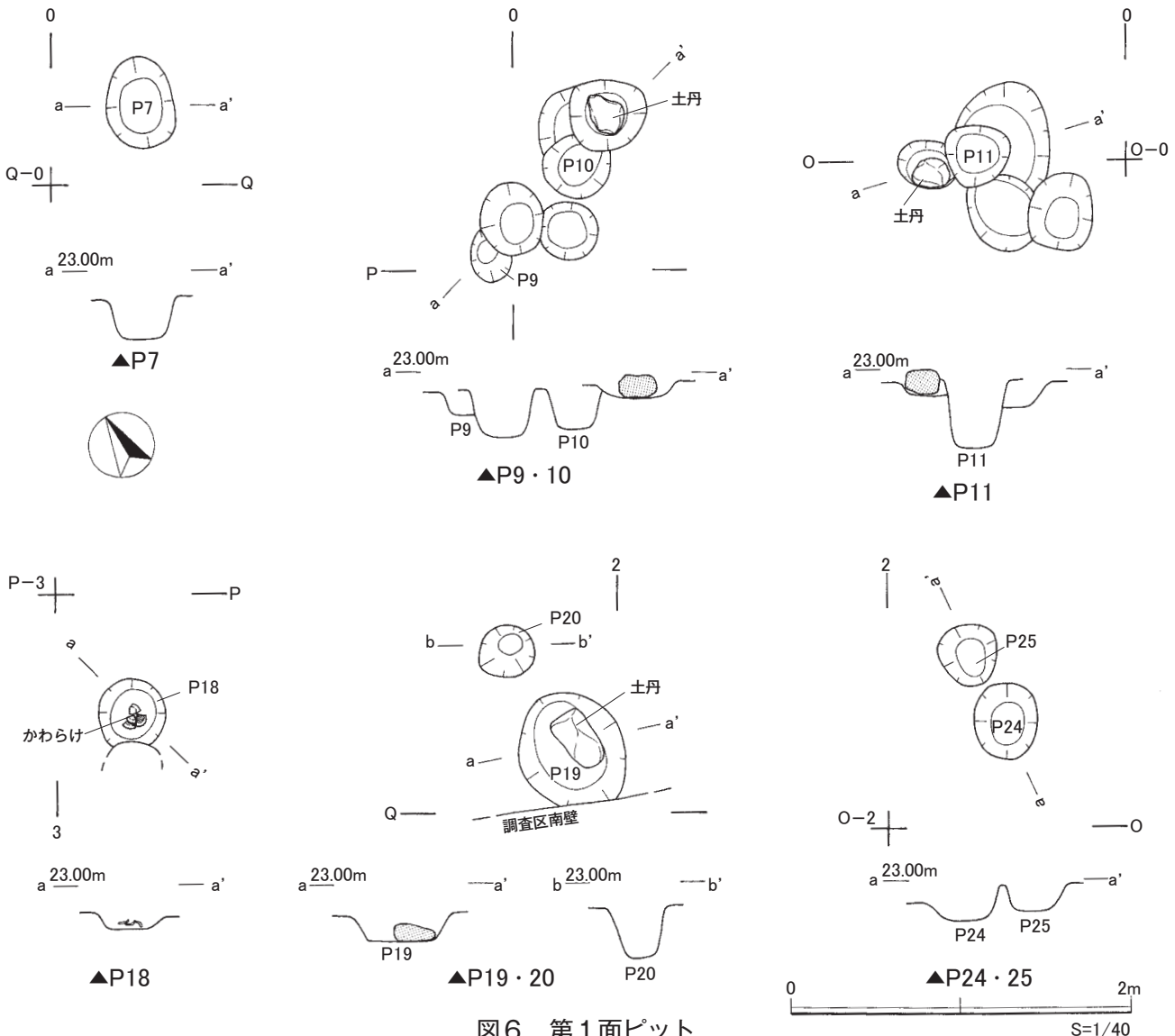


図6 第1面ピット

平面形状は楕円形を呈し、大きさは長径135cm以上、短径120cm、深さ15cmと浅く平坦な底面である。出土遺物はかわらけ細片が出土しているのみで、図示できる資料はなかった。

b. ピット (図4～7)

P2：Q-2杭に南隣した位置、土坑4を壊して掘り込んでいる。掘り方は円形状を呈し、径55cm、深さ40cmを測り、覆土は2層からなり上層が締りのない暗茶褐色粘質土、下層が粘性の強い茶褐色土であるが、遺物は図示可能なものはない。P7：Q-0杭の北側に位置し、掘り方は楕円形を呈し、長径55cm、短径38cm、深さ25cmで平らな底面の海拔高22.50mを測る。P9：P-0杭に近接した位置である。平面形は楕円形を呈し、長径38cm、短径26cm、深さ16cmと浅い。遺物は図7-6のロクロ成形かわらけ、口縁部内外に煤の付着した灯明皿である。P10：P9北隣に位置する。平面形は不整形円形を呈し、径42cm前後、深さ30cmである。覆土は炭化物・土丹粒を多く含む締まりのない茶褐色粘質土、7の瀬戸折縁皿が出土した。P11：O-0杭の西側に位置する。平面形は不整形円形を呈し、径38cm前後、深さ50cmの掘り方で底面の海拔高22.54mを測る。覆土は土丹粒を多く含む弱粘質土でかわらけ細片を多く含む。遺物は8の瀬戸水注の口縁部片である。

P14～17：これらのピットは土坑3の周囲に位置で検出した。P14は楕円形を呈し、長径45cm、短径36cm、深さ20cmを測り、浅く底面の平らな掘り方である。覆土は炭化物を含む暗茶褐色土、出土した遺物は9のロクロ成形のかわらけでやや厚手器壁で直線的に開く器形である。P15は円形を呈し、径40cm程、深さ26cmの掘り方で茶褐色粘質土の覆土である。P16は楕円形を呈し、長径45cm、短径36cm、深さ32cmを測り、底面の平らな掘り方である。P17は楕円形を呈し、長径47cm、短径40cm、深さ33cmを測り、底面の海拔高22.54mを測る。P18：調査区南東隅付近で検出した。平面形状は円形で径40cm、深さ12cmを測り、浅い掘り方の底面からはかわらけ小皿2点が出土した。覆土は土丹粒・かわらけ粒を多量に含む締まりのない茶褐色土である。11・12のかわらけ小皿は薄手器壁で器高の高い資料である。

P20～22：P20はP-1グリットに位置する。平面形は不整形円形を呈し、径33cm前後、深さ30cmで小さな底面径である。覆土は締まりのない茶褐色粘質土、遺物は12の薄手器壁で直線的に開いた器形の極小かわらけである。P21・22は調査区中央のO-2杭付近で検出した。平面形はそれぞれ楕円形を呈し、長径30cm以上、短径25cm、浅い掘り方である。遺物はロクロ成形のかわらけ皿であるが、P21の資料は13が薄手器壁で高めの器形、14が厚い底部器壁から直線的に開く器形であり、P22から出土した15は厚手器壁で体部中位に稜をもつ極小かわらけであった。

P24：O-2杭の北隣で検出した。掘り方は長径46cm、短径35cm、深さ20cmの楕円形を呈する。16の瀬戸瓶子が出土した。P26：調査区南東隅で調査区外に架かる位置で検出した。掘り方は径35cm以上、深さ35cmを測り、底面に鎌倉石片と土丹塊が据えられていた。覆土はかわらけ片・炭化物・土丹粒を多めに含む暗茶褐色粘質土である。

c. 第1面遺構外出土遺物 (図7)

図7-18～23はロクロ成形のかわらけ皿である。小皿は口径7cm以下の小型なもので、薄手の器壁で背高気味の器形である。大皿は22が背高気味で内湾した器形であるのに対し、21・23は底部から開き気味で直線的に立ち上がる器壁をもち、口縁が外反傾向の器形である。24は瀬戸灰釉碗で体部から口縁部にかけて緩やかな立て上がりをもつ器形である。25は瀬戸入子で精良均質な胎土の硬い焼き、外底面に糸切痕をとどめる。26は瓦質火鉢の口縁部片である。

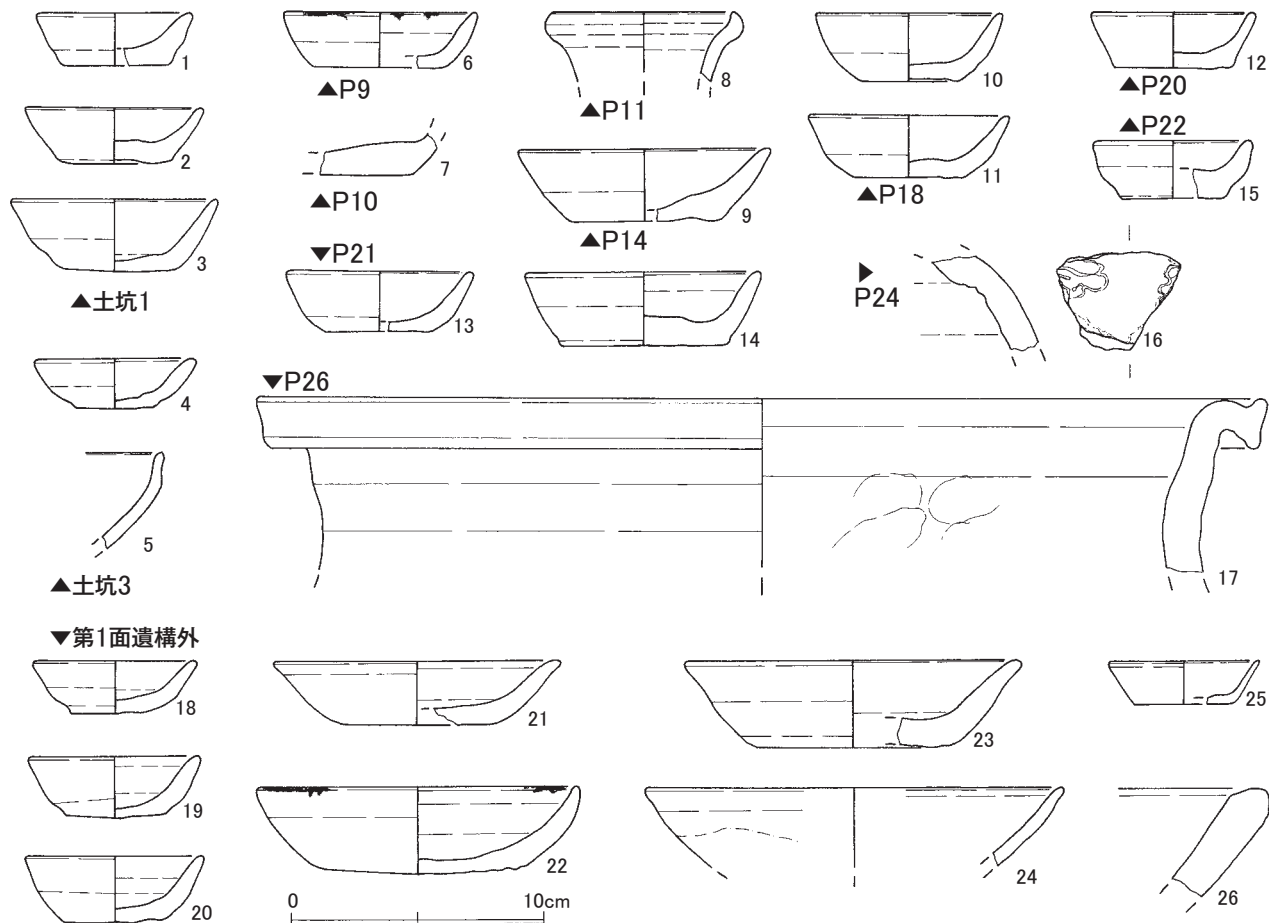


図7 第1面遺構・遺構外出土遺物

2. 第2面の遺構と遺物

第2面は1～3層からなる厚い造成土を除去して表出した4層の炭化物層や5層の暗茶褐色粘質土の堆積層を挟んで海拔高22.10m前後で確認された。この面は概ね3～5cm角の破碎した土丹塊を混入した粘性の強いしまりのある青灰色土による地形層である。この面に伴う遺構は南北溝（溝1）を挟んだ東西域に建物跡3軒（西が建物1・2、東が建物3）を検出している。出土した遺物は図9のようにかわらけをはじめ、青磁・白磁の貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯の国産陶器、火鉢・瓦類の瓦質品、筭・装飾具の骨角製品、銭や飾金具の金属製品、箸や曲物の木製品などがみられた。

a. 掘立柱建物・礎石建物（図8～13）

建物1・2：調査区西壁にほぼ沿って重複関係をもつ二時期の柱穴列が検出されたので建物1・2と呼称した。これは各柱穴掘り方の大きさや柱間寸法から考えて、調査区外に拡がりをもせる掘立柱建物（建物1・2）として捉えたものであり、新旧は建物2を壊して掘り込み建物1が新しい遺構である。

建物1は、調査区内で確認した規模が南北三間（約5.20m）、東西方向は溝1の東側域においては対応する柱穴は発見されないで調査区西壁・北壁外に延びる掘立柱建物であろう。南北方向の柱間寸法は、各柱穴の芯々距離で北端にあたる柱穴（建物1-1）から南端の柱穴（建物1-4）までが136cm、186cm、198cmの柱間間隔である。検出面の海拔高22.10m前後を測り、軸方位はN-23°10'-Eである。各柱穴の掘り方は、平面形が不整円形を呈し、規模は径40～60cm、深さ25cm前後と浅く、底面の平らな断面形を呈し、底面の海拔高21.90m前後である。遺物は図11で示したように1～6はかわらけ小皿、舶載品は青磁蓮弁文碗の7・8、白磁口兀の9が皿・10が碗である。

建物2は調査区内の規模が南北三間(約5.30m)、溝1東側域で対応する柱穴は発見されていない。南北方向の柱間寸法は、各柱穴の芯々距離で北端にあたる柱穴(建物2-1)から南端の柱穴(建物2-4)までが128cm、210cm、192cmを測る。検出面の海拔高22.10m前後、軸方位はN-23°-Eである。各柱穴掘り方は平面形が不整円形を呈し、規模は径40~60cm、深さ50cm前後と深めの掘り込みである。柱穴2-3には一辺15cm角になる柱が遺存していた。各柱穴底面の海拔高22.65m前後である。遺物はかわらけが11~14のロクロ成形の小皿、舶載陶磁器は14の青磁蓮弁文碗と15の泉州窯系の盤である。

建物3: 調査区東半部で検出した建物で、掘り方は全体に浅く1口に伊豆石礎石を伴っていたので礎石建物と考えられる。溝1東側の掘り方列(イ列)は建物3の建つ空間の西の限界を示すが調査区外に拵がっているため全容は不明である。調査区内で確認した規模は南北三間(約6.45m)、東西一間以上(3.65m以上)であり、柱間寸法は各掘り方芯々の間隔で南北方向が215cm(約7.2尺)、東西方向が210cm(約7尺)を測る。さらに建物内からは建築材の一部と思われる角材、柱通りや半間の柱間通りに一定間隔で配置された礎板があり、床束柱を支えたものと推定される。検出面の海拔高22.10m前後、主軸方位はN-23°50'-Eである。各柱穴の掘り方は、平面形が不整円形を呈し、規模は径40~60cm、深さ15~20cmと浅く底面の平らな断面形を呈し、底面の海拔高21.90m程である。

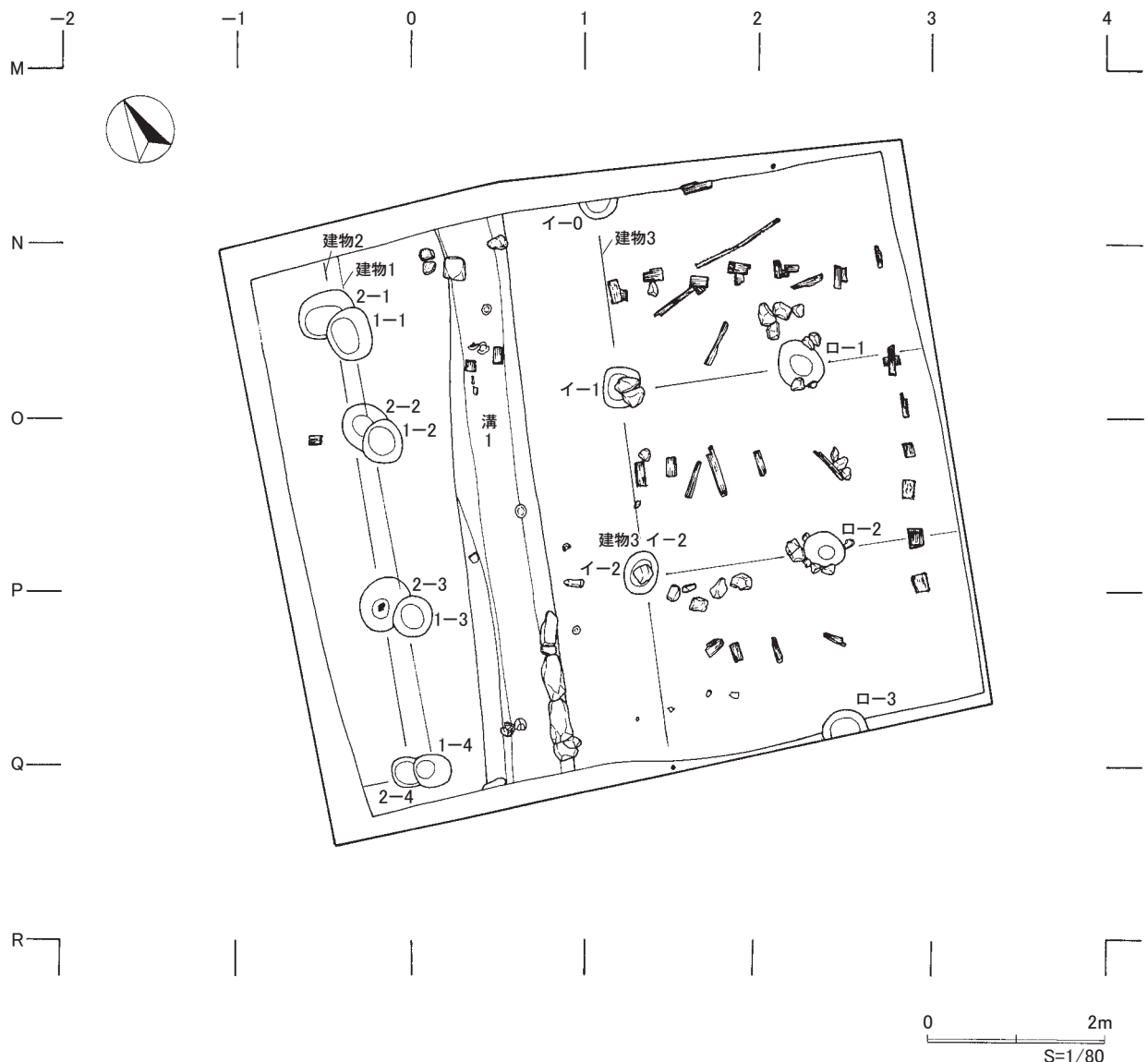
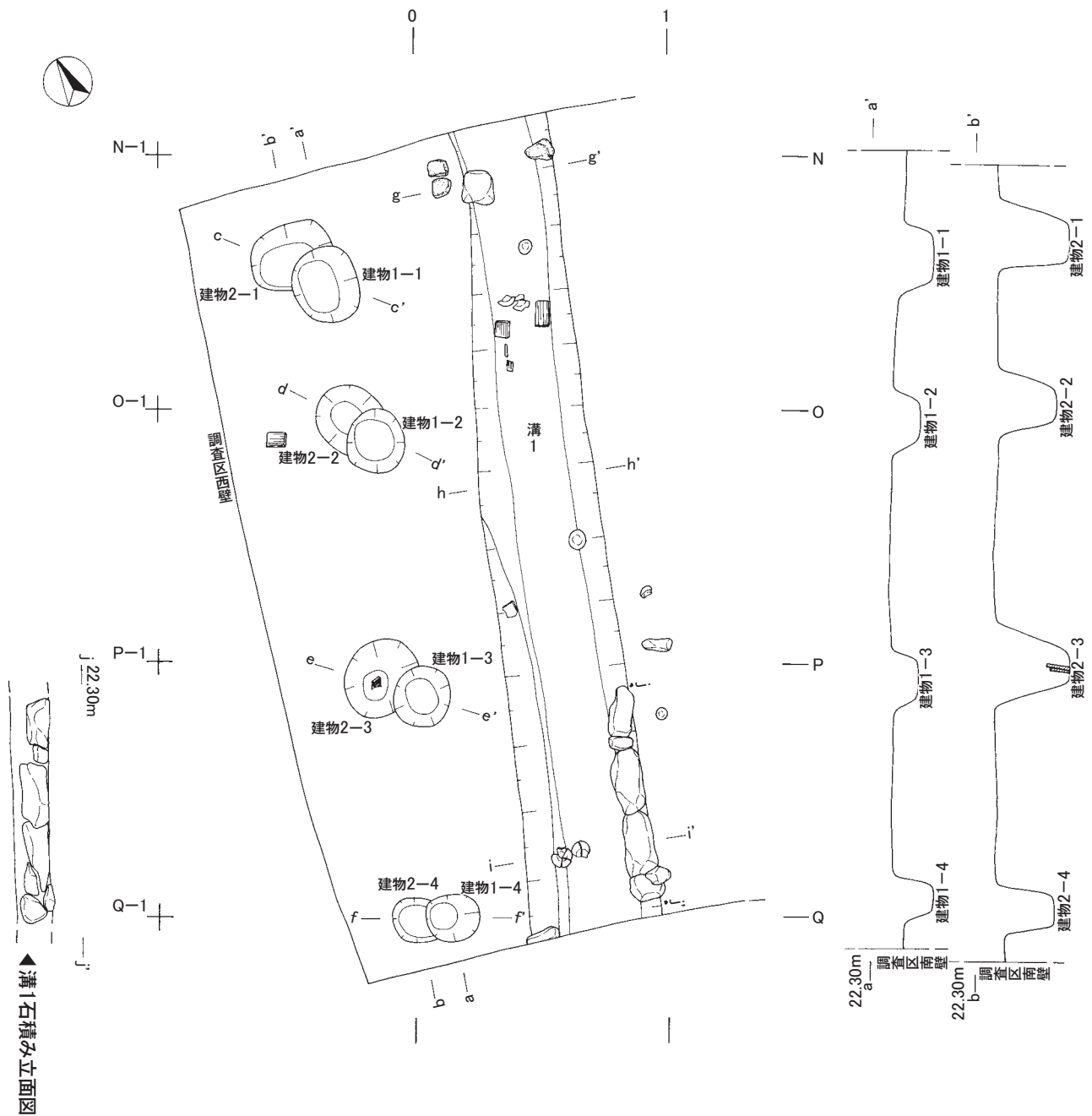
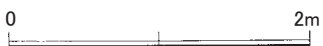
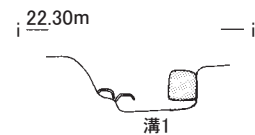
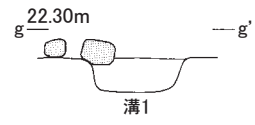
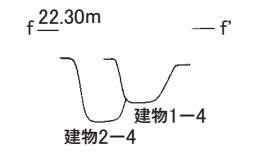
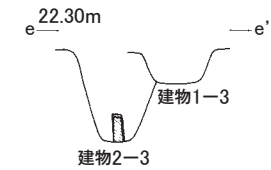
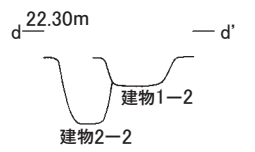
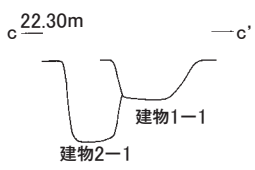


図8 第2面遺構全測図



溝1石積み立面図



S=1/50

図9 第2面建物1・2、溝1

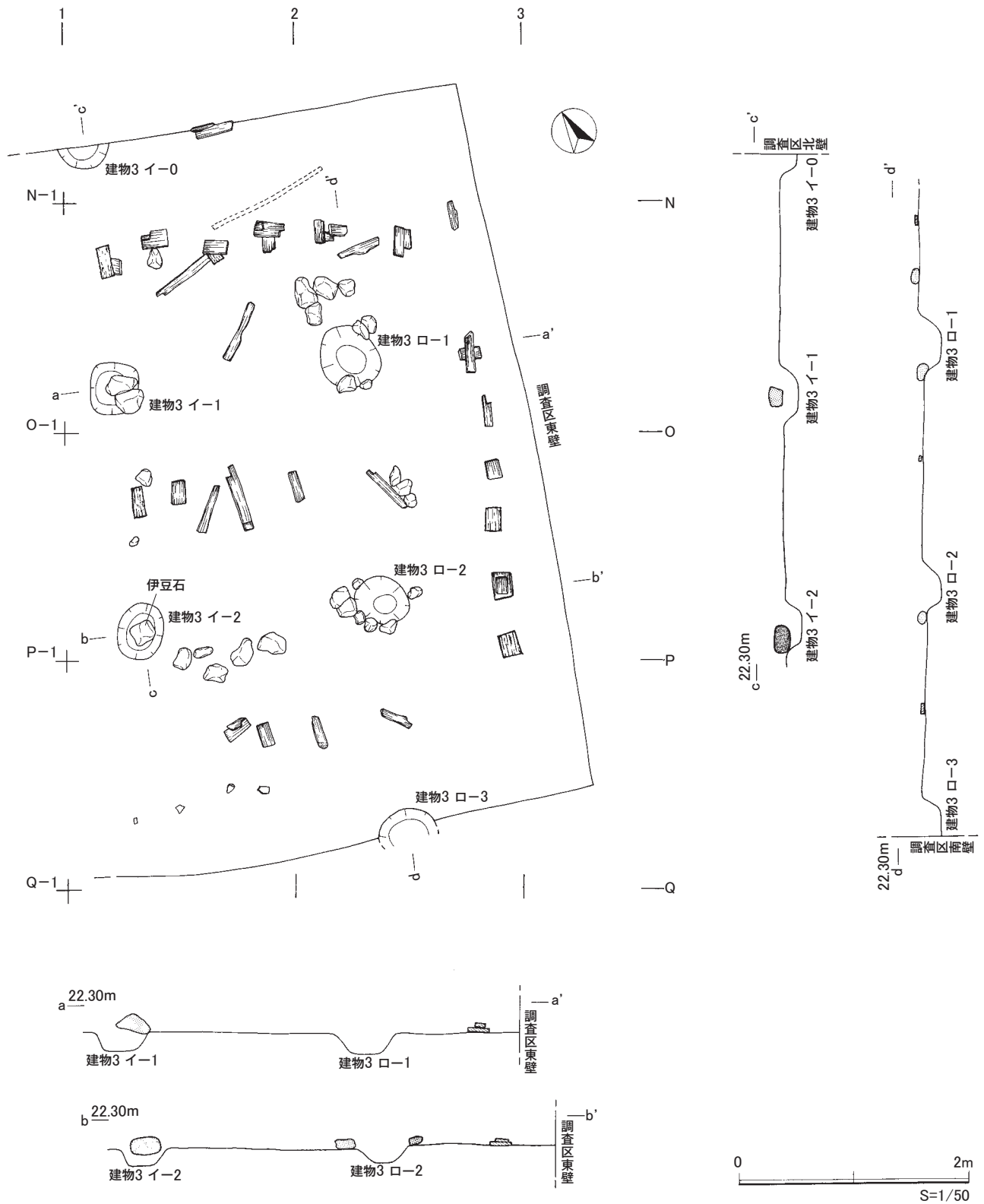


図10 第2面建物3

b. 溝 (図9・11)

溝1：調査区中央西寄りで南北方向の両岸を土丹塊を並べて補強したような溝を確認した。主軸方位はN - 23° 50' - Eを測る。南北両端は共に調査区外に延び、全容は不明である。土丹塊は南側の東岸で一部確認できたが、後世の攪乱や開削により土丹塊は抜き取れていた。土丹塊には大小あり、大きいものは長辺40～50cm、幅20cm、高さ20cm程の扁平に加工している。規模は長さ6.5m以上、上面幅80～95cm、底面幅50cm、深さ30cm前後を測り、掘り方断面は逆台形を呈する。出土遺物は図11 - 17～42が覆土中、43～50が裏込土中からである。覆土中の遺物はかわらけが17～20の小皿で口径7.4～8.0cm、底径4.9～

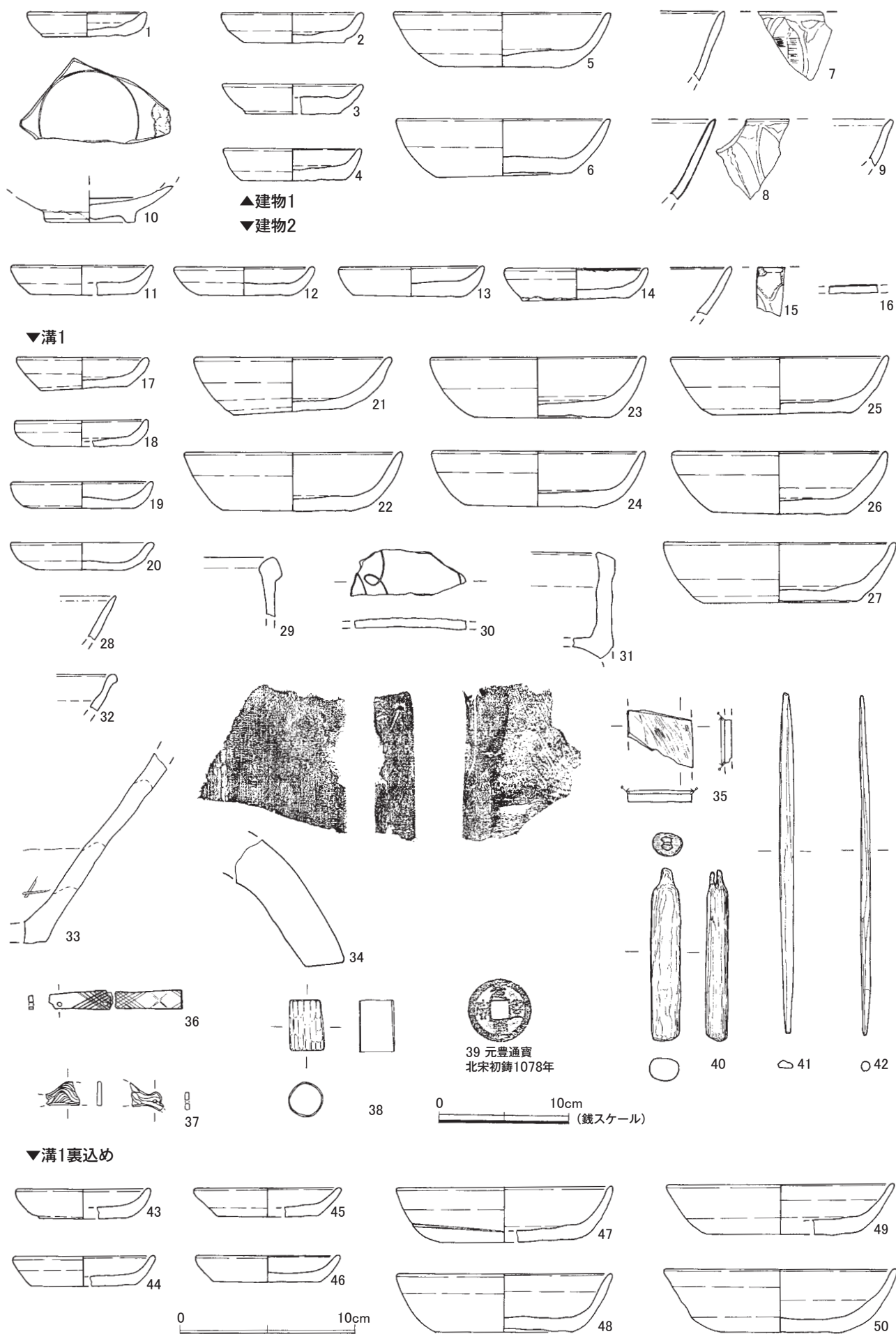


図11 第2面建物・溝

5.6cm、器高1.5cm前後で口径と底径の比率が小さく、低めの器高が主体である。21～27の大皿は器高3cmを超える背高気味で側面観碗型を呈する。28～31が白磁口元皿や泉州窯系の盤・香炉、32・33の瀬戸窯皿・常滑窯甕、34は永福寺Ⅱ期男瓦と同類、35は京都鳴滝産の仕上砥石、36～38の骨角製、39の北宋銭「元豊通寶」、40～42が木製品である。

c. 第2面遺構外出土遺物

図12の遺物は第1面下～第2面上の地形層・遺物包含層(1～7)と、建物1・2の確認精査中(8～34)で出土した資料とは分けて掲載した。16～20は青磁蓮弁文碗・白磁口元碗皿・施釉陶盤、4・5・21は瀬戸窯碗・入子、6・22は常滑窯片口鉢・甕、7は渥美窯甕、23は瓦質火鉢、24～31は銅製品の飾り金具や留め金具と北宋銭の「咸平元寶」「皇宋通寶」「紹聖元寶」「政和通寶」、32～34は木製品である。

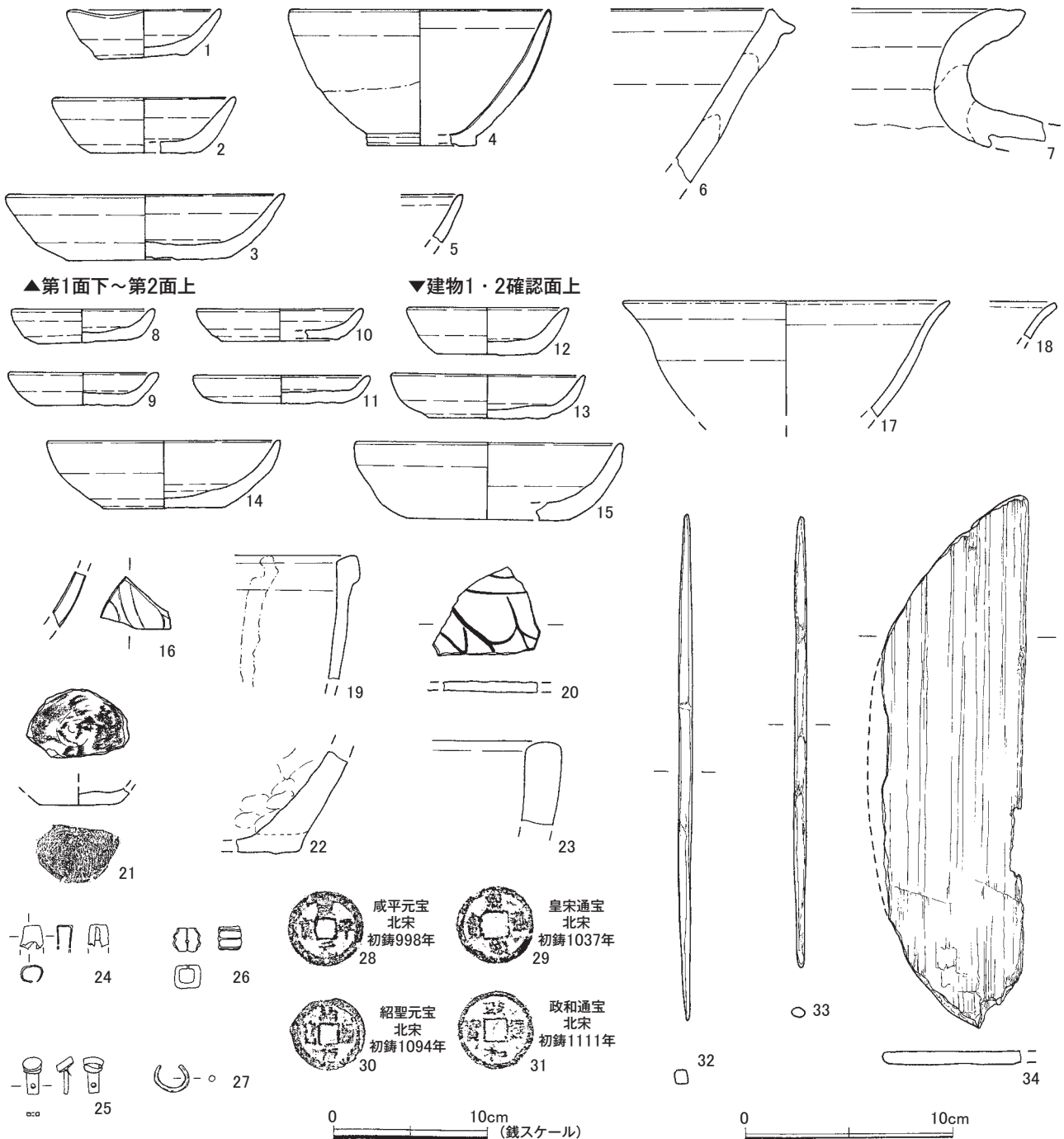


図12 第2面建物1・2内、遺構外出土遺物

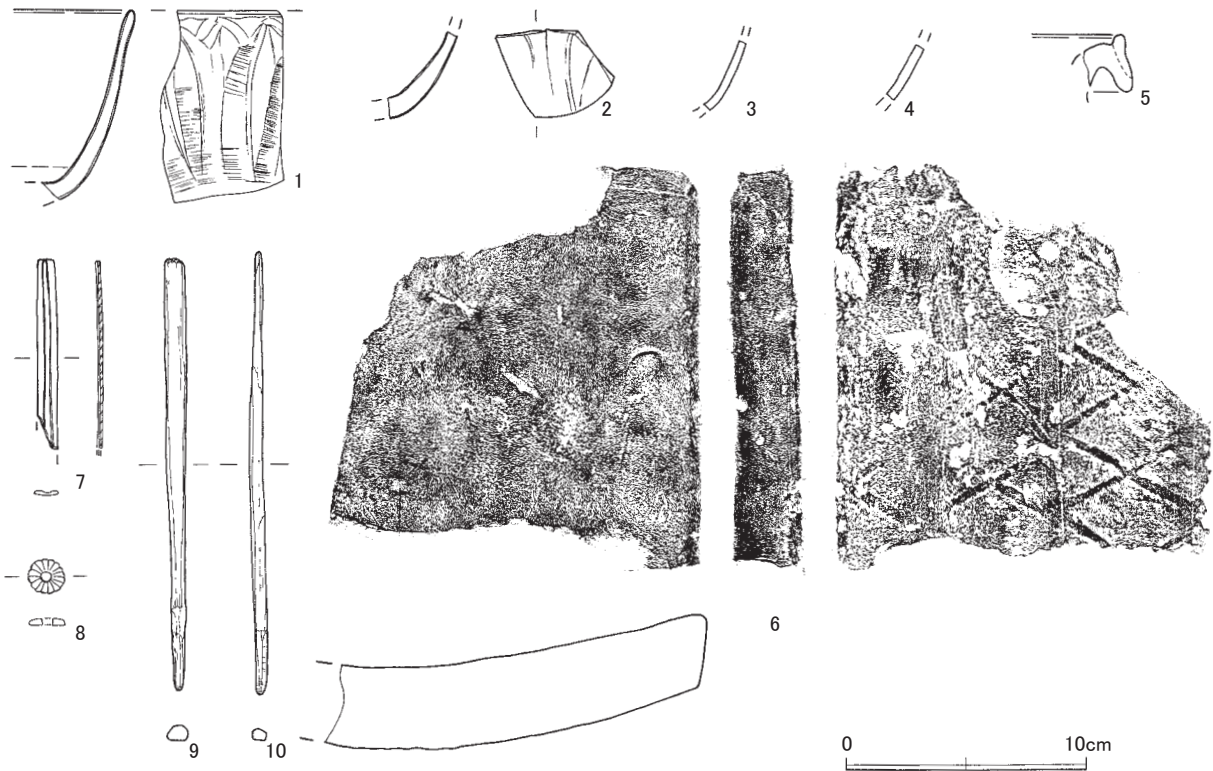


图13 第2面建物3内出土遺物

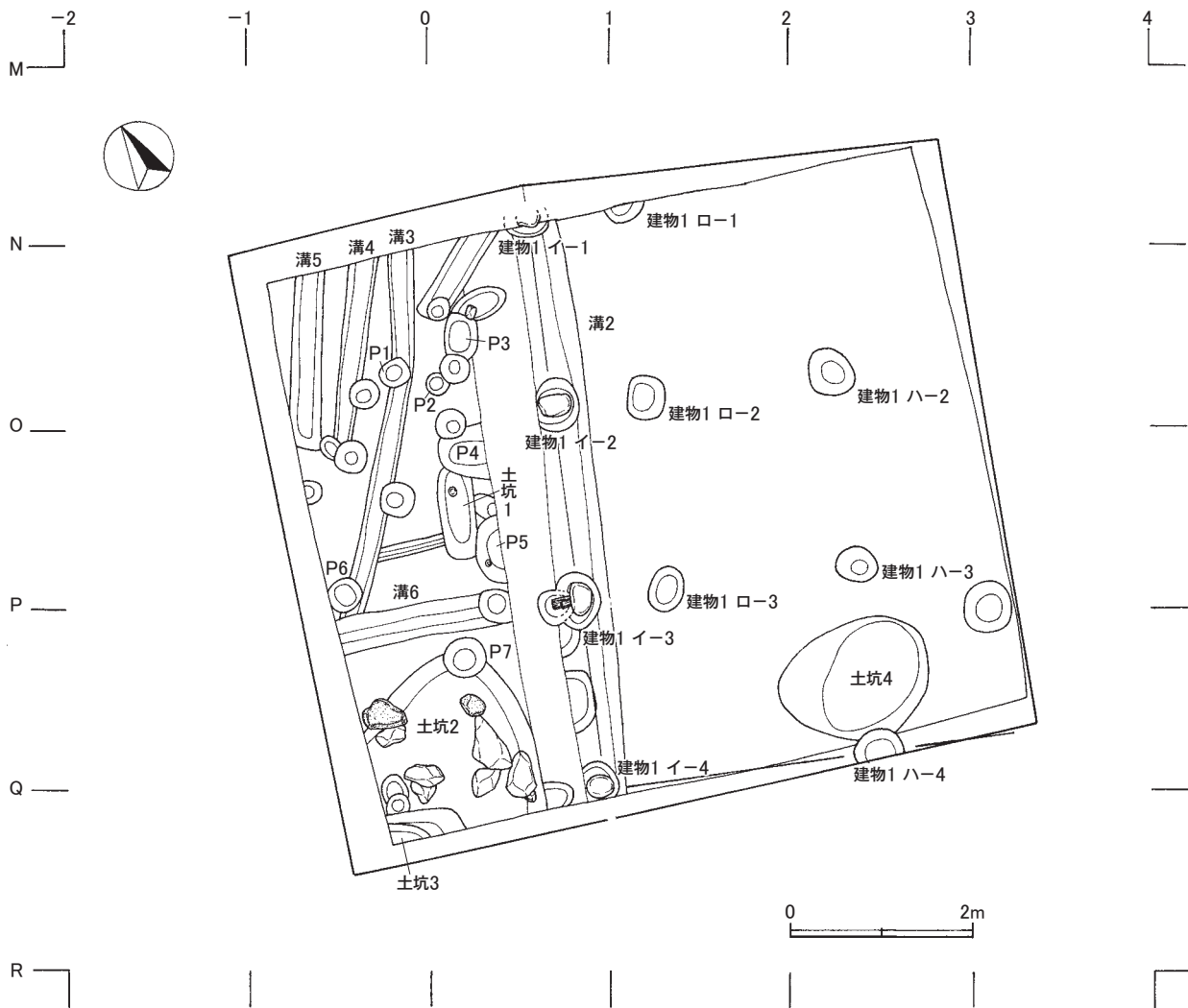


图14 第3面全測図

S=1/80

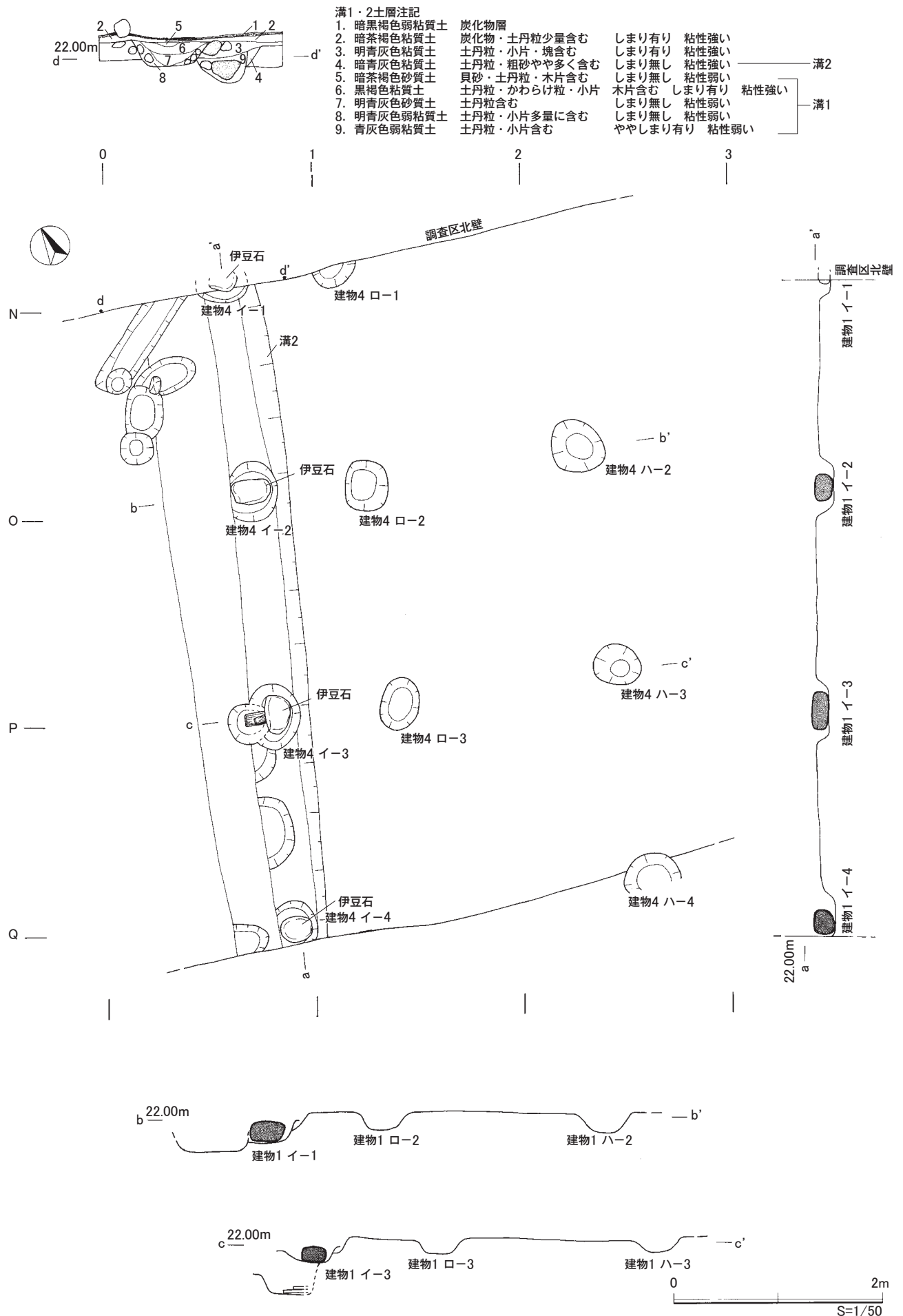


図15 第3面 建物4・溝2

3. 第3面の遺構と遺物

第3面は薄い地形層の第2面構築土を除去すると、7層暗茶褐色粘質土と土丹粒を多量に混入した青灰色弱粘質土の薄い堆積が認められ、その直下は中世基盤層であった。この中世基盤層を構成しているのは調査区の北西域が岩盤削平面、東側が黒褐色粘質土ブロックを含む暗青灰色粘質土であった。遺構は礎石建物1軒、土坑4基、溝6条、ピット15口などを検出した。遺構確認面の海拔高は22.10m前後である。出土遺物はかわらけ、貿易陶磁器の青磁・白磁碗皿、常滑窯壺甕、木製品などである。

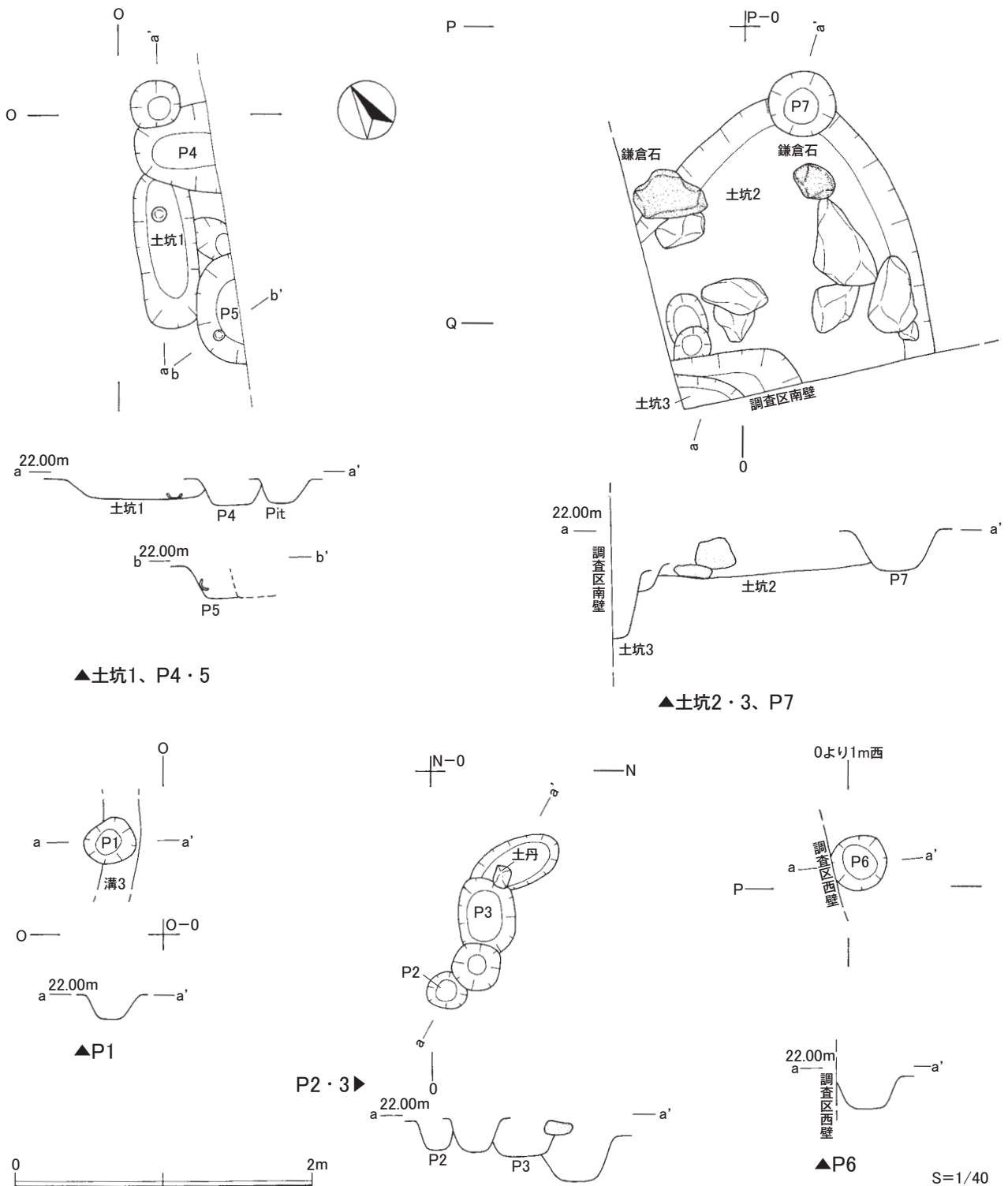


図16 第3面 土坑・ピット

a. 礎石建物 (図 15)

建物4：調査区東側域で第2面溝1の東に位置している。礎石は溝1に沿って検出した建物東端にあたる南北列3間分の4個だけであったが、遺構精査により柱通りに一定の間隔で礎石が抜き取られた掘り方(礎石抜き方か)を検出することできた。調査区内での確認規模は南北3間×東西2間以上、礎石が残されていた西列は柱間寸法が半間(約100cm)になり、縁が取り付く建物と推定された。調査区外に拡がるため全体の規模や構造を明確にすることはできなかったので、ここでは建物の柱間寸法、各礎石掘り方の大きさや特徴について触れる。柱間寸法は西列の礎石芯々の間隔から各一間210cm(約7尺)と推定される。遺存する礎石は、形状が楕円～不整円形を呈し、径25～40cm、厚さ15～20cm、安山岩製(伊豆石)河原石の扁平なものを用いている。礎石上面の海拔高22.00m前後でほぼ水平な値を示し、主軸方位はN-23°50'-Eである。掘り方は平面形状が楕円～不整円形、径35～50cmで逆台形状の断面形を呈し、底面からの深さ10～18cmと浅い掘り方である。掘り方などからは掲載可能な遺物は出土していない。なお、本建物は調査区内での掘り方の配置や土層堆積などの重複関係を観察する限り、第2面で検出した建物3とは縁の取り付きを除き同位置で建て替えた可能性が高い。

b. 溝 (図 14・15・17)

溝2：調査区中央西寄りの位置で南北方向に走る溝を検出したが、第2面溝1と建物4によって壊され、東半部を残すだけである。主軸方位は建物3・4と同一の軸方位を示し、南北両端は共に調査区外に延びている。規模は上面幅55cm以上、底面幅40cm以上、深さ20cm前後を測る。溝底の海拔高は北端が約22.0m、南端が21.9m程で北から南に向かって緩やかに傾斜している。

溝3～6：調査区西側寄りの位置で削平岩盤面を掘り込む溝を4条検出した。いずれも規模は小さくU字形断面を呈する浅い溝であり、調査区外に延びた簡易的な排水溝と思われる。溝3は調査区の北壁0ラインに隣接した地点から西壁のPライン付近へ南に向かい緩やかな流れをもち、南端部は溝6により削平されている。確認した規模は長さ4.2m以上、上面幅30cm、底面幅18cm程、深さ15cm前後、溝底は

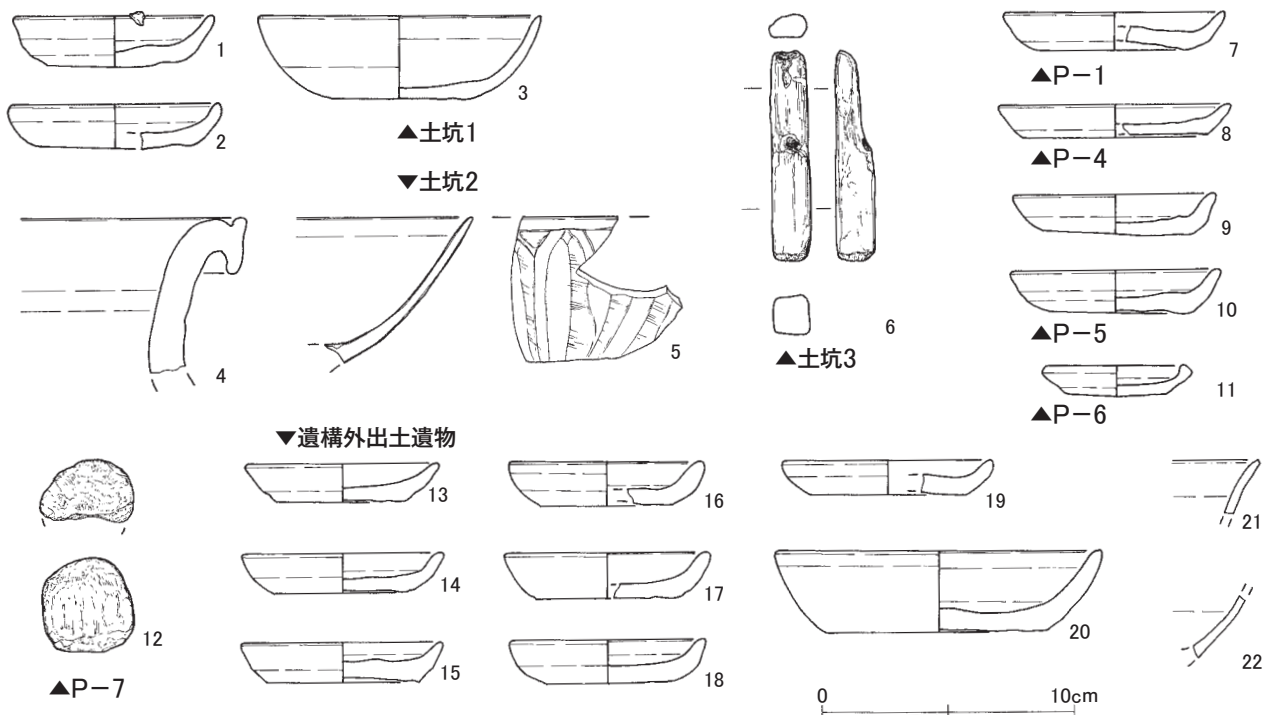


図 17 第3面 遺構・遺構外出土遺物

平坦な造りである。溝4は溝3の西隣に位置し、南端がOライン付近である。確認した規模は長さ2.1m以上、幅20～30cm、深さ10cm、南端が狭くなる掘り方である。溝5は溝4の西隣でほぼ平行した位置にある。確認した規模は長さ2.0m以上、幅32cm前後、深さ15cm、溝底はほぼ平坦である。溝6はPライン沿いの東西位で確認され、東端は溝1に削平される。確認した規模は長さ1.9m以上、上面幅40cm、底面幅18cm前後、深さ20cmを測り、溝底はほぼ平坦である。

c. 土坑(図16・17)

土坑1：0-0杭北側に位置する。平面形は南北に長い隅丸長形状を呈し、大きさは長径105cm、短径45cm、深さ30cm、底面の平坦な浅い掘り方である。覆土は土丹粒や炭化物を含む黒褐色粘質土である。出土遺物は図17-1～3のロクロ成形のかわらけである。

土坑2・3：調査区南西隅に位置し、調査区外に拡がっているため全容は不明である。土坑2は確認した規模が南北径200cm・東西径215cm以上、深さ30cm、底面はほぼ平坦である。掘り方底面から肩部にかけて20～60cm程の土丹塊と鎌倉石がまとまりのない配置で9個発見された。覆土は土丹粒・粗砂を含む黒褐色弱粘質土であり、それに伴う遺物は4・5の常滑壺・青磁蓮弁文碗である。土坑3は覆土が土丹粒・土丹小塊を含む締めりのない黒褐色弱粘質土、図示可能な遺物は6の柄状木製品だけである。土坑2と重複関係にあるが、本址が新しい。

d. ピット(図16・17)

P1：0-0杭の北隣に位置し、溝3を壊して掘り込んでいる。掘り方は円形状を呈し、径30cm、深さ20cmを測り、覆土は土丹粒を多く含む暗茶褐色弱粘質土、遺物は図17-7の口径8cm以上で背低器形の糸切底かわらけ小皿が出土した。P4・5：0-0杭の南隣に位置し、土坑1と重複するが両ピットが新しい。P4は楕円形を呈し、径50cm以上、深さ22cmで平らな底面の海拔高22.55mを測る。出土遺物は8のかわらけ小皿で背低の器形を呈する。P5は径60cm以上、深さ30cmで底面が平坦な掘り方である。覆土中からは9・10のかわらけ小皿で口径8cm前後の背低器形である。P6：調査区西壁Pラインの位置で溝3と重複関係にあるが本址が新しい。平面形は円形を呈し、径38cm、深さ25cmと浅い。遺物は11のロクロ成形かわらけで小口径の内折れ皿である。P7：土坑2と重複するが本址が新しい。平面円形状を呈し、径45cm、深さ30cmである。覆土は炭化物・土丹粒を多く含む締めりのない黒褐色弱粘質土、遺物は12の球状の木製品である。

e. 第3面遺構外出土遺物：図17-13～22の遺物は、この面の遺構に伴う資料以外で生活面上の包含層や地形層から出土したものである。13～20はロクロ成形のかわらけで小皿は口径7.5～8.2cmを測り、低めの器高をもつ内湾気味の器形であり、大皿はやや厚手器壁で低めの器高を呈している。21・22は白磁口兀皿・碗である。

4. 第3面下の調査区南東トレンチ

第3面の調査終了後に掘り残し遺構や岩盤削平面の様相を把握する目的で調査区南東隅にトレンチを設定して遺構の確認調査を実施した。その結果、海拔高は南端約21.85m・北端約21.60mと緩やかに南へ傾斜した岩盤削平面が表出した。遺構は岩盤面を掘り込んだ土坑、溝状遺構、ピットなどの遺構を検出したが、これらに伴う遺物はかわらけ小片や木端片だけで実測可能な資料は認められなかった。

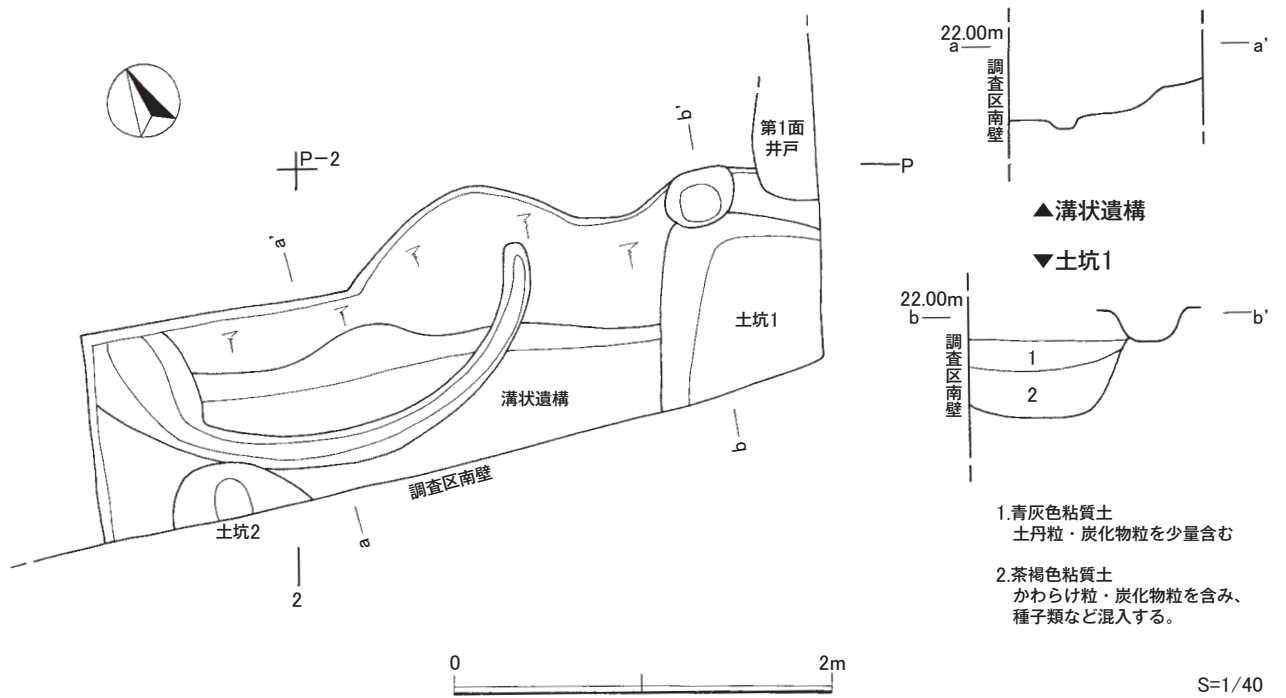


図18 第3面下調査区南東トレンチ

土坑1・2：調査区南東隅に位置し、土坑2基は調査区外に拡がっているため全容不明である。土坑1は確認できた規模が南北径100cm・東西径85cm以上、深さ55cmの断面U字形の掘り方を呈し、底面の海拔高21.45mを測る。覆土は上層が土丹粒・炭化物を含む青灰色弱粘質土、下層は茶褐色粘質土でかわらけ粒・炭化物を含んでおり、瓜科と思われる種子類が少量混入していた。土坑2は確認した規模が東西径75cm・南北径30cm以上、深さ25cmを測り、覆土は土丹粒・粗砂を含む青灰色弱粘質土の単層である。

表1 遺物観察表(1)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
7-1	第1面土坑1	かわらけ	(6.0)	(4.0)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
7-2	"	かわらけ	(6.8)	(3.4)	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.橙色 e.良好
7-3	"	かわらけ	7.9	4.5	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
7-4	第1面土坑3	かわらけ	(6.4)	(3.1)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好
7-5	"	瀬戸 天目茶碗	口縁～体部片			a.ロクロ b.砂粒 良土 c.灰白色 d.茶～黒褐色 薄手施釉 e.良好
7-6	第1面P-9	かわらけ	(7.7)	(5.1)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好 f.口縁部広範囲に煤付着 灯明皿
7-7	第1面P-10	瀬戸 折縁皿	底部小片			a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.灰白色 砂粒 良土 d.灰白色 灰釉が外底部まで薄手施釉 e.良好 硬質
7-8	第1面P-11	瀬戸 水注	(7.9)	—	—	b.灰白色 砂粒 良土 d.緑灰色 やや厚め施釉 外側面剥離する e.良好 硬質
7-9	第1面P-14	かわらけ	(10.0)	(5.6)	2.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
7-10	第1面P-18	かわらけ	(7.4)	(3.6)	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
7-11	"	かわらけ	(8.0)	(4.4)	2.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
7-12	第1面P-20	かわらけ	(6.6)	(4.6)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
7-13	第1面P-21	かわらけ	(7.4)	(4.1)	2.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
7-14	"	かわらけ	(9.4)	(6.6)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好
7-15	第1面P-22	かわらけ	(6.4)	(4.0)	(2.2)	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
7-16	第1面P-24	瀬戸 瓶子	肩部小片			b.白灰色 砂粒 良土 d.灰緑色～暗灰緑色 薄手施釉 e.良好 硬質 f.蓮花唐草文風の紋様
7-17	第1面P-26	常滑 甕	(40.0)	—	—	a.輪積技法 b.黄橙色 白色粒 赤色粒 砂粒 c.褐灰色 d.自然降灰 e.硬質 f.中野編年6a型式
7-18	第1面上	かわらけ	6.2	3.8	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.橙色 e.良好
7-19	"	かわらけ	(6.6)	(4.0)	2.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
7-20	"	かわらけ	(6.9)	(5.2)	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
7-21	"	かわらけ	(11.2)	(5.8)	2.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
7-22	"	かわらけ	12.5	7.5	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.灯明皿
7-23	"	かわらけ	(13.0)	(7.6)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂多め 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
7-24	"	瀬戸 灰釉碗	(16.4)	—	(3.2)	a.ロクロ b.明灰色 砂粒 良土 d.灰釉 灰緑色透明 粗い貫入あり 外面体部下半露胎 e.良好
7-25	"	瀬戸 入子	(5.9)	(3.9)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.灰白色 白色粒 良土 d.内面見込 外面灰緑色自然釉 e.良好
7-26	"	瓦質 火鉢	口縁部小片			b.白桃色 砂粒 やや粗土 c.白色～白桃色 e.良好 f.外面口縁部下2条沈線と菊花文の押印
11-1	第2面建物 1-1	かわらけ	6.8	(4.5)	1.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-2	"	かわらけ	7.9	5.6	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-3	"	かわらけ	(7.8)	(5.3)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄灰色 e.やや甘い

表2 遺物観察表(2)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
11-4	"	かわらけ	7.6	5.6	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-5	"	かわらけ	12.2	7.2	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-6	"	かわらけ	12.0	7.3	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.所々に鉄分付着
11-7	第2面建物1-1	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.淡灰緑色半透明 薄手施釉 f.外面蓮弁文を片切彫
11-8	"	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 やや厚く施釉 貫入あり f.外面蓮弁文を片切彫
11-9	"	白磁 口元皿	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色～淡橙色 精良堅緻 d.灰白色不透明 薄手施釉 口唇部の釉剥ぎとり f.二次焼成受け釉白濁
11-10	第2面建物1-3	白磁 口元皿	高台径5.0			a.ロクロ b.白色 精良堅緻 d.緑味灰白色不透明 薄手施釉 f.内底面に一本の沈線が巡る
11-11	第2面建物2-2	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-12	"	かわらけ	(7.8)	5.2	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-13	第2面建物2-4	かわらけ	8.0	6.3	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-14	"	かわらけ	8.0	5.8	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.口唇部煤付着 灯明皿
11-15	"	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.緑褐色半透明 f.外面蓮弁文を片切彫
11-16	"	泉州窯系 盤	底部小片			a.ロクロ b.暗灰色 白色砂粒少量 良土 d.黄褐色 やや厚く施釉 f.二次焼成で器表荒れ明確ではないが二彩・三彩の可能性あり
11-17	第2面溝1	かわらけ	7.4	4.9	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-18	"	かわらけ	(7.4)	(5.5)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-19	"	かわらけ	8.0	5.6	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 c.橙色 e.良好
11-20	"	かわらけ	(8.0)	(5.0)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-21	"	かわらけ	11.0	6.4	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-22	"	かわらけ	12.2	7.5	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c.黄橙色 e.良好
11-23	"	かわらけ	12.2	7.5	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-24	"	かわらけ	12.0	7.6	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-25	"	かわらけ	12.2	7.8	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-26	"	かわらけ	12.0	7.7	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-27	"	かわらけ	13.0	8.8	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い f.二次焼成受け外面体部下位～底部に焼け痕あり
11-28	"	白磁 口元皿	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色半透明 ごく薄手施釉 f.口唇部露胎
11-29	"	泉州窯系 盤	口縁部小片			b.黄味灰白色 白色砂粒やや多め やや粗土 d.緑色～濃緑色 やや厚く施釉 f.二次焼成で器表荒れ明確ではないが二彩の可能性あり
11-30	"	泉州窯系 盤	底部小片			b.暗灰色 白色砂粒やや多め やや粗土 d.黄色～緑色 やや厚く施釉 f.二彩・線彫りの文様
11-31	"	泉州窯系 緑釉香炉	口縁～底部小片			b.灰色 白色砂粒やや多め やや粗土 d.緑色～濃緑色 やや厚く施釉 f.小片の為器形が定かではない 口縁部・底部は釉が剥離
11-32	"	瀬戸 皿	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 砂粒 良土 d.灰緑色 薄手施釉 e.良好 やや軟質

表3 遺物観察表(3)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 底径 器高			a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
11-33	"	常滑甕	底部～胴部小片			a.輪積技法 b.暗灰色 白色粒少量 砂粒 c.暗赤褐色 降灰部:灰白色 f.内部底辺近くにへら傷有り
11-34	"	男瓦	厚さ 2.3～2.6cm			a.凸面:縄目叩きを縦方向ナデによりナデ消す 凹面:離れ砂若干付着 布目痕 縦方向糸切痕 b.灰色 白色粒 小石粒 砂粒 やや粗土 c.灰黒色 e.良好
11-35	第2面溝1	砥石	残存長2.7幅3.6 厚さ0.4～0.5			b.黄灰色 f.仕上砥 鳴滝産 上面のみ細かな擦痕(刃物痕)有り
11-36	"	骨角製品 装飾品	残存長6.9孔径0.2 幅0.9～1.0厚0.2			f.斜格子の紋様が線刻される 二次焼成受ける 裏面未加工
11-37	"	骨角製品 装飾品	残存長1.9幅1.3厚0.2 残存長1.7幅1.0厚0.2			f.波状文が線刻される 二次焼成受ける 接合できないが同一個体の破片2点 一方には径0.2mm程の孔有り
11-38	"	骨角製品 管状	長さ2.9径2.0厚さ0.1			f.外面削りをかけ軽く磨きを施す 刷毛の軸の加工途中とも考えられる
11-39	"	銅銭	外径24.2mm内径19.0mm 孔径6.2mm厚さ1.2mm			f.元豊通寶 北宋 初鑄1078年
11-40	"	木製品 用途不明	長さ9.8径1.2～1.7			a.楕円状に削り、片端が細く凸状に加工
11-41	"	木製品 箸	長さ19.2厚さ0.8			a.刃物で断面多角形に削り、両口加工
11-42	"	木製品 箸	長さ19.0厚さ0.5			a.刃物で断面多角形に削り、両口加工
11-43	第2面溝1 裏込め中	かわらけ	(7.4)	5.0	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好
11-44	"	かわらけ	(7.9)	(5.9)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
11-45	"	かわらけ	(8.2)	(5.7)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-46	"	かわらけ	(8.0)	6.2	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-47	"	かわらけ	(12.2)	(7.4)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.暗黄橙色 e.良好 f.体部下位にへら傷有り
11-48	"	かわらけ	(12.0)	7.8	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
11-49	"	かわらけ	(12.8)	(8.2)	2.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.暗黄橙色 e.良好
11-50	"	かわらけ	13.0	6.5	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
12-1	第1面下 ～2面上	かわらけ	7.4	4.2	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部に歪みあり
12-2	"	かわらけ	(8.6)	(5.1)	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-3	"	かわらけ	13.2	7.8	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
12-4	"	瀬戸 天目茶碗	(12.4)	(5.2)	6.4	a.ロクロ b.明灰白色 砂粒 白色粒 良土 d.茶～黒褐色 やや厚く施釉 e.良好 軟質
12-5	"	瀬戸 碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 砂粒 白色粒 良土 d.灰緑色 やや厚く刷毛塗り e.良好 硬質 f.二次焼成の為所々釉剥げる
12-6	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片			a.輪積み技法 b.灰色 砂粒・白色粒・黒色粒少量含む 良土 c.暗赤褐色 e.良好
12-7	"	渥美 甕	口縁部小片			a.輪積み技法 b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 c.灰色～黒褐色
12-8	第2面上	かわらけ	6.8	4.3	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内外面共に鉄分カルシウム付着
12-9	"	かわらけ	(7.0)	(4.4)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
12-10	"	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-11	"	かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好

表4 遺物観察表(4)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
12-12	"	かわらけ	(7.6)	4.8	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-13	"	かわらけ	(9.0)	(5.4)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-14	"	かわらけ	(11.0)	5.7	3.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-15	第2面上	かわらけ	12.6	(7.8)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-16	"	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	体部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 やや砂粒多め d.灰緑色半透明 やや厚く施釉 貫入あり
12-17	"	白磁 口兀碗	(15.6)	—	—	a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 やや砂粒多め d.灰白色半透明 薄手施釉 f.内外面共にピンホール有り 口縁部～体部片約1/8
12-18	"	白磁 口兀皿	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色半透明 薄手施釉 f.口唇部内側露胎
12-19	"	泉州窯系 盤	口縁部小片			b.灰白色～灰色 白色砂粒含むが良土 d.緑色 f.二次焼成で器表荒れ明確ではないが二彩・三彩の可能性あり 他に同一個体と思われる胴部破片一点有り
12-20	"	泉州窯系 盤	底部小片			b.灰色 白色砂粒含むが良土 硬質 d.黄褐色 f.二次焼成で器表荒れる 線彫りの文様あり 文様不詳 他に同一個体と思われる胴部破片一点有り
12-21	"	瀬戸 入子	—	3.9	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.灰白色 白色粒 砂粒 良土 e.硬質 良好 内底面に黒色物質付着
12-22	"	常滑 甕	底部小片			a.輪積技法 b.灰色 白色粒 砂粒 c.暗褐色～暗赤褐色
12-23	"	瓦質 火鉢	口縁部小片			a.へら成形 b.灰白色 砂粒多量 小石粒 d.灰色～黒灰色 f.黒色処理
12-24	"	銅製品 用途不明	残存長 1.1 径 0.8 高さ 1.0 厚さ 0.05			f.経典等の軸芯両端につく隅金具か
12-25	"	銅製品 目釘	長さ 1.8 幅 0.6 厚さ 0.2 上部径 1.0 孔径 0.2			f.留め金周縁に細い花卉状の刻が入る 下方に孔有り
12-26	"	銅製品 用途不明	厚さ 0.2～0.3			f.一辺 1.1cm の立方体の様な形真中は空洞 用途不明の為向き定かでないが上面中央部に径 0.1cm の孔、側面に三本ずつ切り込みがあり、上下面から見ると花卉の様になる
12-27	"	銅製品 環状金具	径 1.4～1.7			f.留め金部分と思われる
12-28	"	銅銭	外径 24.8mm 内径 18.4mm 孔径 5.6mm 厚さ 1.5mm			f.咸平元寶 北宋 初鑄 998 年
12-29	"	銅銭	外径 24.6mm 内径 19.8mm 孔径 7.0mm 厚さ 1.4mm			f.皇宋通寶 北宋 初鑄 1037 年
12-30	"	銅銭	外径 23.8mm 内径 17.6mm 孔径 5.4mm 厚さ 1.5mm			f.紹聖元寶 北宋 初鑄 1094 年
12-31	"	銅銭	外径 25.4mm 内径 20.7mm 孔径 6.0mm 厚さ 1.4mm			f.政和通寶 北宋 初鑄 1111 年
12-32	"	木製品 箸	長さ 26.0 厚さ 0.7			a.刃物で断面多角形に削り、両口加工
12-33	"	木製品 箸	長さ 21.3 厚さ 0.6			a.刃物で断面多角形に削り、両口加工
12-34	"	木製品 曲物	残存長 25.3 厚さ 0.6			f.曲物底の 1/4 程度破片
13-1	第2面直上 (溝1より東側)	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁～底部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.灰緑色不透明 やや厚く施釉
13-2	"	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	体部小片			a.ロクロ b.灰色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 やや厚く施釉 貫入あり
13-3	"	白磁 口兀碗	体部小片			a.ロクロ b.灰色 精良堅緻 d.再火で白濁した灰緑色の不透明 薄手施釉
13-4	"	白磁 口兀皿	体部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色不透明 薄手施釉 ピンホール有り
13-5	"	常滑 甕	口縁部小片			a.輪積技法 b.灰色 白色粒・黒色粒・砂粒少量 c.赤褐色 降灰部:灰緑色 d.自然降灰 f.中野編年 6 型式に相当と考えられる
13-6	"	女瓦	厚さ 3.0～3.4			a.凹面:離れ砂若干付着 縦方向ナデ 凸面:離れ砂若干付着 斜格子の叩き目(叩き板幅 5.5cm) 端面:削り 端縁:やや幅広の削り 側面:削り 側縁:ナデ b.灰白色 白色粒 砂粒 良土 c.灰色 e.良好 f.部分的に二次焼成受け暗灰色

表5 遺物観察表(5)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
13-7	〃	骨角製品 筭	残存長7.8幅1.0厚さ0.2			a.骨を刃物で削り出す幅が狭く薄い作り
13-8	〃	骨角製品	径1.5 中央孔径0.4			f.装飾具 中央に穴があけられ周縁より孔に向け線刻した菊花文
13-9	〃	木製品 箸	長さ17.8厚さ0.8			a.片端欠失 刃物で断面多角形に削り加工
13-10	第2面直上 (溝1より東側)	木製品 箸	長さ18.2厚さ0.6			a.刃物で断面多角形に削り、両口加工
17-1	第3面土坑1	かわらけ	7.8	5.5	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
17-2	〃	かわらけ	(8.3)	(6.2)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
17-3	〃	かわらけ	(11.1)	(4.8)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 良土 c.黄橙色 e.良好
17-4	第3面土坑2	常滑 壺	縁帯～頸部片			a.輪積技法 b.明灰色 黒色粒 白色粒やや多め c.褐色 降灰部:明灰緑色 e.良好 f.中野編年6a型式
17-5	〃	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁～体部小片			a.ロクロ 外面:鎬蓮弁文 b.灰白色 精良堅緻 d.灰緑色透明 薄手施釉
17-6	第3面土坑3	木製品 用途不明	長さ8.2幅1.5 厚さ0.9～1.6			f.先端部と中央に黒漆と思われる黒色の付着物あり
17-7	第3面P-1	かわらけ	(8.6)	(5.6)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
17-8	第3面P-4	かわらけ	(9.0)	(7.2)	1.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
17-9	第3面P-5	かわらけ	7.9	5.8	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
17-10	〃	かわらけ	8.1	5.3	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
17-11	第3面P-6	かわらけ	(5.4)	(3.8)	1.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
17-12	第3面P-7	木製品 球状	径3.7			a.球状に加工を施す 毬杖の玉のようなものか
17-13	第3面上	かわらけ	(7.5)	(5.2)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
17-14	〃	かわらけ	(7.9)	(5.2)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
17-15	〃	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 良土 c.黄橙色 e.良好
17-16	〃	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
17-17	〃	かわらけ	(7.9)	(5.6)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 良土 c.黄橙色 e.良好
17-18	〃	かわらけ	(7.6)	4.8	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
17-19	〃	かわらけ	(8.2)	(6.2)	1.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
17-20	〃	かわらけ	12.8	8.4	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.二次焼成を受け所々黒く変色
17-21	〃	白磁 口元碗	口縁部小片			a.ロクロ b.白色 精良堅緻 d.暗白色透明 薄手施釉 口唇部露胎
17-22	〃	白磁 口元碗	体部小片			a.ロクロ b.白色 精良堅緻 d.暗白色透明 薄手施釉 内外面施釉

第四章 まとめ

本遺跡周辺には既に廃寺となっているが、「二階堂」の地名に由来する源頼朝御願寺の大寺院永福寺がある。当寺は奥州平泉の中尊寺二階大堂・大長寿院を模して造立され、別に二階堂と号した。鎌倉宮(大塔宮)の地は東光寺の旧跡と伝えら、その西側に残る小字名「四つ石」(永福寺総門=礎石建ちの四脚門か)から二階堂川を挟んだ北東方の支谷には理智光寺があり、裏山の丘陵上には足利直義によって殺害された護良親王の墓塔が建っている。調査地点は紅葉ヶ谷の開口部東寄りに位置し、谷戸奥には遺跡名称にもなった瑞泉寺がひっそりとした佇まいをみせている。当寺は嘉暦二年(1327)の開創、二階堂南芳庵に住していた夢窓疎石を開山、二階堂道蘊(貞藤)開基と伝えられているが、はじめ瑞泉院と称したという。奉行人の二階堂氏は、鎌倉以来の豪族で工藤氏(伊豆伊東氏)からの分流であり、鎌倉初期から幕府に仕えていた行政は『吾妻鏡』建久五年(1194)十二月二日条に永福寺阿弥陀堂の奉行人として中原親能や武藤頼平と共にその名を連ねており、氏の称はこの二階堂に由来したもので、永福寺周辺に邸宅を構えていたのにちなんだ可能性を持っている。

今回の調査において検出した遺構は谷戸内の山裾岩盤と中世地山とを削平して造成した第3面と、その上に破碎土丹塊を混ぜた地形層による第2面が、その上層の海拔高約22.70mでは拳大~頭大の大小土丹塊を多量に用いた厚い整地造成を挟んで検出したのが第1面で土地利用の変革を窺わせた。さらに図19に掲載した本調査地点の北側に位置した調査地点2(二階堂字紅葉ヶ谷647番6外地点:松吉・原2009)の調査においても同一造成を思わす破碎した大小土丹塊の厚い整地層が発見され、第1面の構築に伴う造成層と同じ工法の様相を示しており、海拔高約23.20mで確認された。両調査地点の整地層上面は比高差50cm程であり、これは現地形の北から南へと傾斜する谷戸地形にほぼ相応する比高差になるもので同時期に造成されたと想定できる。このような谷戸内における大小土丹塊の整地造成では、周囲の丘陵や山裾を大規模に掘削して行われた工事と思われるが、こうした丘陵や山裾の切り崩しと、土砂の搬出などには何らかの権力が介在したことが想像されよう。

第3・2面に発見された同一軸方向を示した礎石建物や掘立柱建物は、調査地が寺院関連施設や屋敷跡の一画であったことを窺わせるが、この建物が寺院関連施設だったことを積極的に示唆する遺物は認められなかった。屋敷跡の一画であったかもしれない。第3・2面に伴う遺物は出土資料総数の6割以上を占めており、その中でロクロ成形のかわらけが多くを占めている。建物内や土坑から出土したかわらけにはいわゆる「薄手丸深」形状が混じっていたこと、そして図示不可能な細破片を含めても手づくね成形のかわらけは全体量で僅か3点だけで、この両生活面に伴う建物は13世紀後葉以降、14世紀前葉に建てられたものと思われる。第1面の構築に伴う大造成において明確化する土地利用の変化は、調査地点2も合わせてそれ以前とは異なる性格を持ち始めたことを窺わせる。出土したかわらけの特徴は、薄手丸深型が主体をなしていたが、この他に体部が直線的に開き、側面観が逆台形状気味を呈した器形資料も一定量が混在しており、14世紀中頃から15世紀前葉に比定されるものと考えられる。

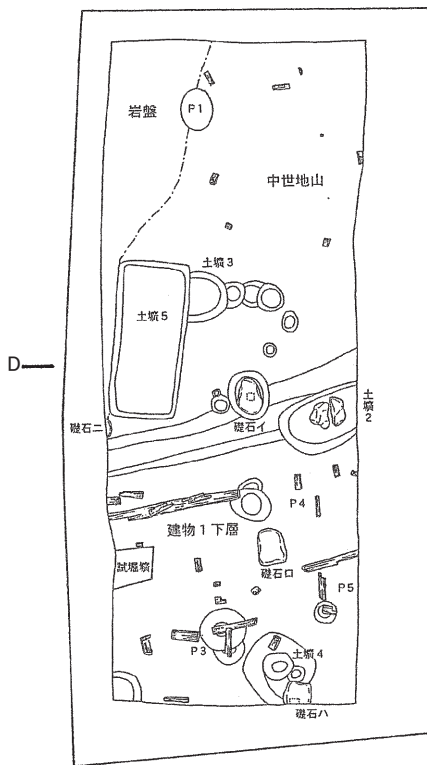
次に今回の調査からはコンテナ箱で5箱の遺物が出土した。ここでは表6を参照にして、出土遺物の種類別の出土量や出土比率の組成について述べることにしたい。なお、出土点数については便宜上、接合後の破片数(個体数)を使用している。この表では遺物をかわらけ(ロクロ・手捏ね成形)貿易陶磁器(青磁・白磁・青白磁)、国産陶器(瀬戸・常滑・渥美窯産品)、土製類(瓦類・瓦質火鉢・土器質火鉢)、石製品(砥石・滑石)、金属製品(銭・鉄滓他)、骨角製品、木製品(箸他)、自然遺物(動物骨・



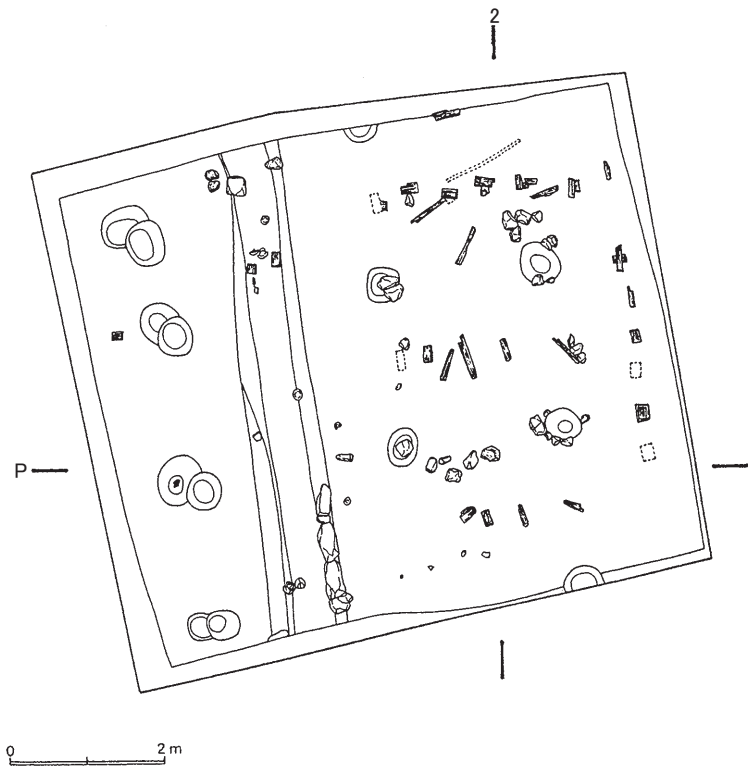
▲近隣調査地点位置図



2



▲調査地点2 (図1参照)

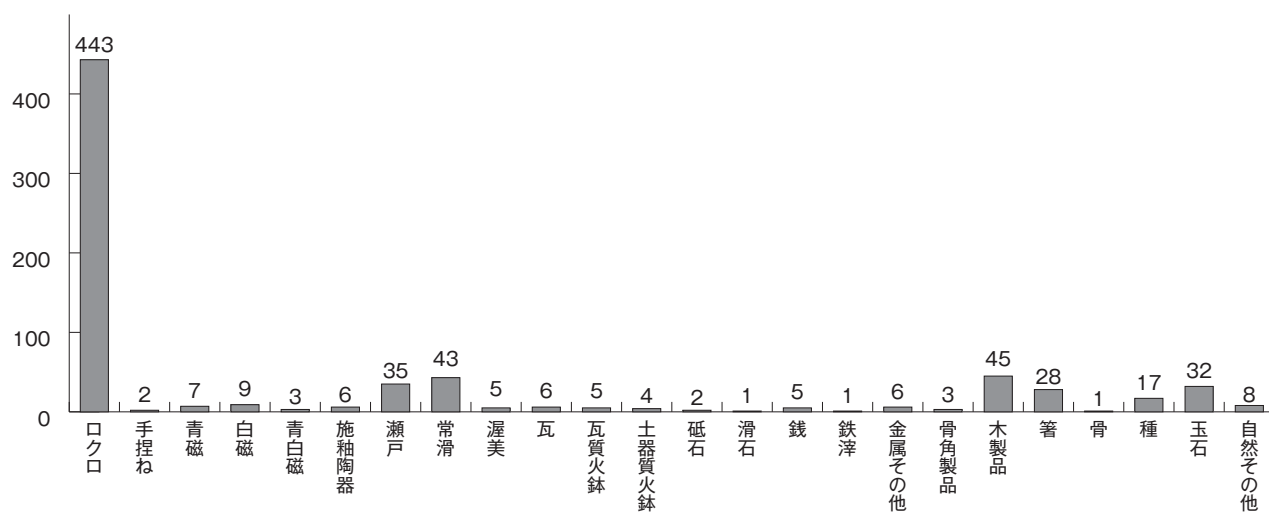


▲本調査地点

図19 近隣調査地点対応図

表6 遺物分類別出土数量・比率表

出土地種類		1面	2面	3面	個数	比率(%)
かわらけ	ロクロ	184	216	43	443	61.79%
	手捏ね	0	0	2	2	0.28%
舶載陶磁器	青磁	0	6	1	7	0.98%
	白磁	0	7	2	9	1.26%
	青白磁	1	2	0	3	0.42%
	施釉陶器	0	6	0	6	0.84%
国産陶器	瀬戸	28	7	0	35	4.88%
	常滑	18	18	7	43	6.00%
	渥美	1	4	0	5	0.70%
土製品	瓦	1	5	0	6	0.84%
	瓦質火鉢	1	4	0	5	0.70%
	土器質火鉢	0	4	0	4	0.56%
石製品	砥石	0	2	0	2	0.28%
	滑石	1	0	0	1	0.14%
金属品	銭	0	5	0	5	0.70%
	鉄滓	1	0	0	1	0.14%
	その他	0	6	0	6	0.84%
加工品	骨角製品	1	2	0	3	0.42%
	木製品	0	32	13	45	6.28%
	箸	0	20	8	28	3.91%
自然遺物	骨	0	1	0	1	0.14%
	種	0	4	13	17	2.37%
	玉石	16	14	2	32	4.46%
	その他	1	7	0	8	1.12%
合計		254	372	91	717	100%
比率(%)		35.43%	51.88%	12.69%	100%	



種子・玉砂利等)に区分している。調査において総数約717点(100%)の遺物が出土し、そのうち58点(8.1%)が自然遺物で、残り562点(78.4%)が土器・陶磁器等の製品であった。最も多く出土したのはロクロ成形を主体としたかわらけ445点(内訳はロクロ成形443点、手捏ね成形2点:62.1%)、ついで箸を含んだ木製品73点(10.1%)、常滑窯43点(6.1%)である。以下、分類別の出土比率についても触れる。

貿易陶磁器は少なく合計25点出土し、その内訳は青磁7点、白磁9点、青白磁3点、施釉陶器6点である。特に青磁では龍泉窯鎬蓮弁文碗、白磁では口元碗皿がほとんどを占めており、施釉陶器は泉州窯系緑釉や二彩の盤が出土した。国産陶器は総数83点(11.6%)が出土し、内訳は瀬戸35点(4.9%)、常滑点(6.0%)、渥美3点(0.7%)である。

谷戸内の土地利用の変化は、両調査地点においてほぼ同じ土地造成の変遷と、近似した様相の遺物を共伴する第3・2面の生活面から同一軸方向を持つ礎石建物や掘立柱建物が検出された。これらの建物が寺院関連の堂舎(庫裡・方丈・僧房など)だったことを積極的に示唆するような明瞭な遺物は伴っておらず、屋敷地跡の一画であった可能性も考えられよう。ところで第1面においては建物は見られなくなるが、丘陵を大規模に掘削するような造成は、鎌倉幕府崩壊後もある程度の権力を保持し続けた権門勢力の係わるような領域であったことを示唆するものであろう。当調査地の谷戸は廃寺などいずれかの寺域の存在はこれまで推定されていないが、周辺には谷戸東奥に瑞泉寺、西に永福寺、南に理智光寺や東光寺などが存在していたと考えられ、この地もいずれかの寺院の影響が及んでいた可能性も否定できない。今後とも谷戸内での調査継続によって、この場の土地利用が次第に明らかにされていくものと思われる。

【引用・参考文献】

- 赤星直忠 1980「永福寺の研究」(『中世考古学の研究』所収) 有隣堂
- 白井永二編 1992『鎌倉事典』東京堂出版
- 宗臺秀明 2002「鎌倉出土の14世紀代かわらけ」『かながわの中世～鎌倉から小田原～ - 土器様式を中心として -』
- 2008「中世鎌倉の都市性」『白門考古論叢』中央大学考古学研究会編
- 宗臺富貴子 1996「鎌倉・今小路西遺跡(御成小学校内)の瀬戸窯製品について - 前期から後期までの出土様相 -」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター - 研究紀要』第4輯
- 中野晴久 2012「常滑窯の展開」『シンポジウム 中世渥美・常滑焼をおって』日本福祉大学知多半島総合研究所
- 貫 達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
- 藤澤良祐 1995「京・鎌倉における古瀬戸の流通」『京・鎌倉出土の瀬戸焼』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 馬淵和雄 1986「鎌倉永福寺とその范池」『佛教藝術』No.164 佛教藝術学会
- 1992「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉』No.69 鎌倉文化研究会



◀ a. 第1面全景
(南から)

b. 第1面全景▶
(東から)

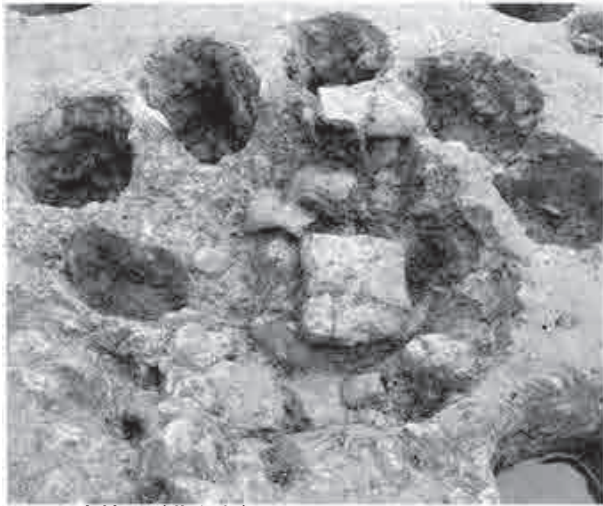


◀ c. 第1面土坑1
(北から)

◀ P 1

第1面

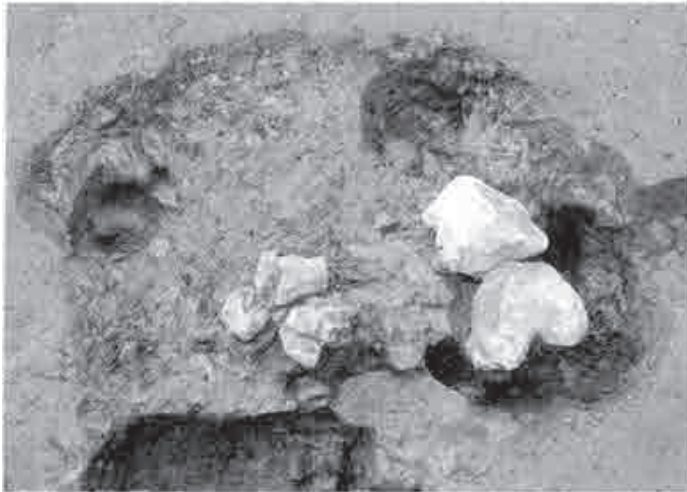
図版2



▲ a. 土坑3 (北から)



▲ b. 土坑4 (南から)



▲ c. 土坑5 (西から)



▲ d. P 18 (北から)



▲ f. 骨製品出土状況



▲ e. P 8、P 26 (西から)



◀ a. 第2面全景
(東から)

b. 第2面全景▶
(南から)



◀ c. 第2面建物1・2、溝1 (南から)

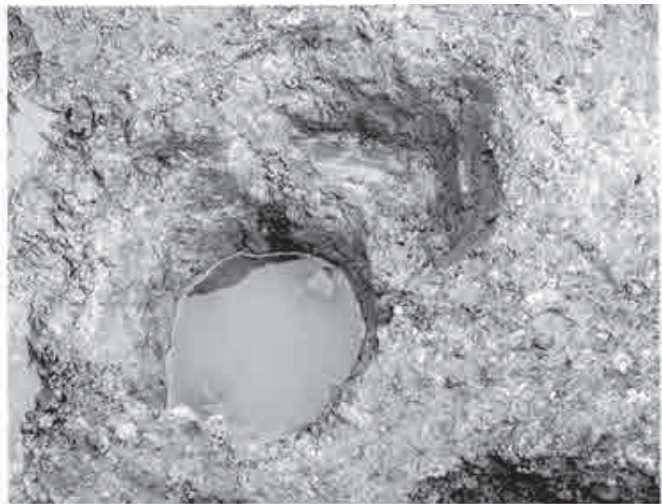


▲ d. 建物3 (東から)

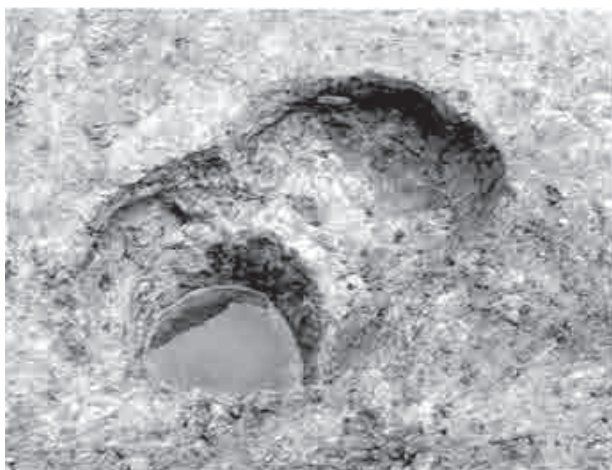
第2面



▲ a. 建物1・2 (北から)



▲ b. 建物1-1・2-1柱穴



▲ c. 建物1-2・2-2柱穴



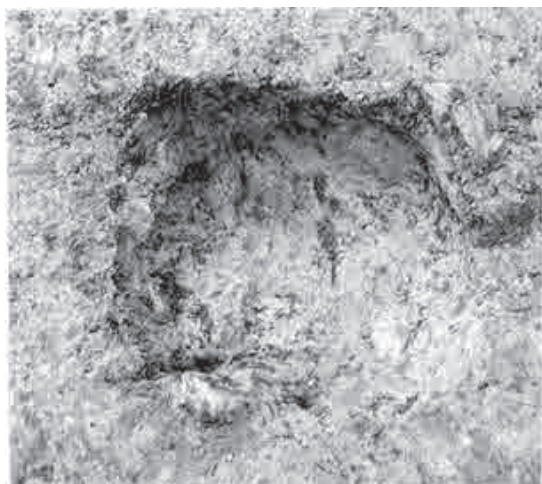
▲ d. 建物1-3・2-3柱穴



▲ e. 建物3検出状況 (北から)



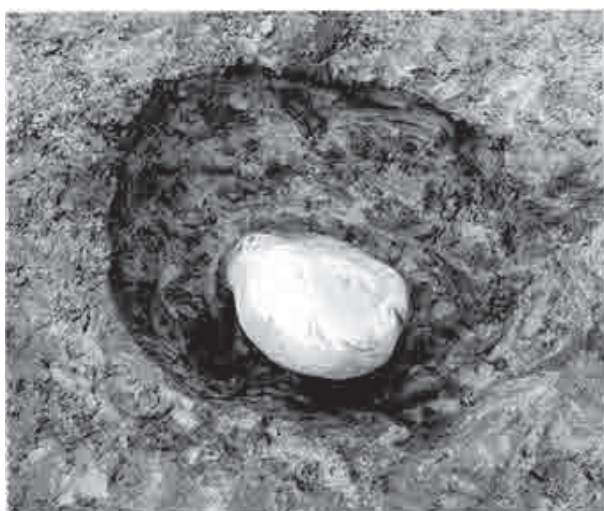
▲ f. 建物3検出状況 (南から)



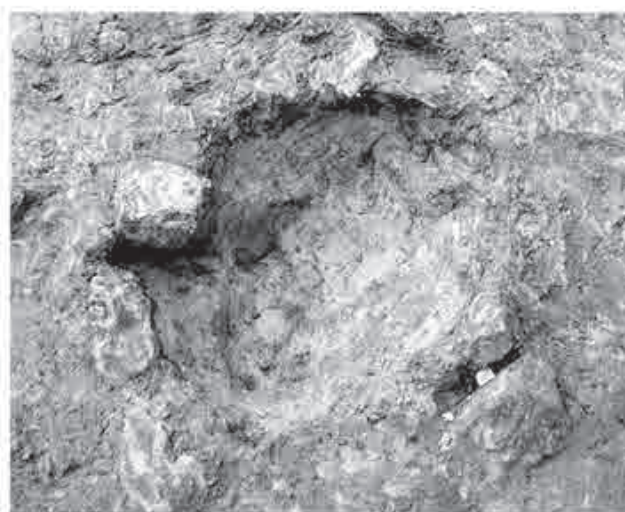
▲ a. 建物3-イ1 (東から)



▲ c. 建物3-口1 (東から)



▲ b. 建物3-イ2 (東から)



▲ d. 建物3-口2 (東から)



◀ e. 建物3 中央礎板列 (西から)



▶ f. 建物3 北側礎板列 (西から)



◀ a. 溝1完掘状況(南から)

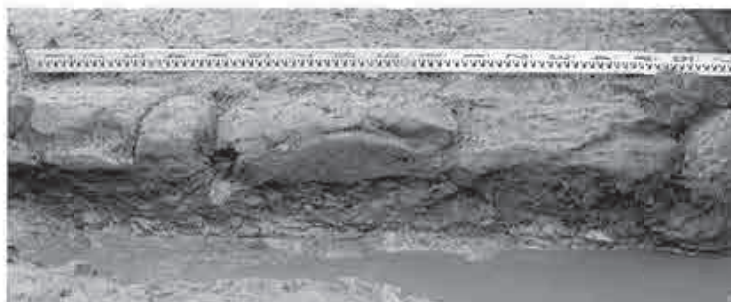


◀ c. 溝1炭化物層検出状況(南から)

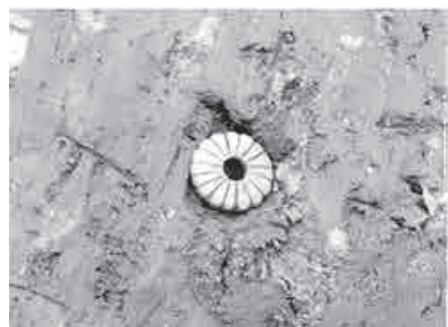
▼ b. 溝1完掘状況(北から)



▼ d. 溝1石組検出状況(西から)



▶ e. 銅製品出土状況



◀ g. 骨製品出土状況

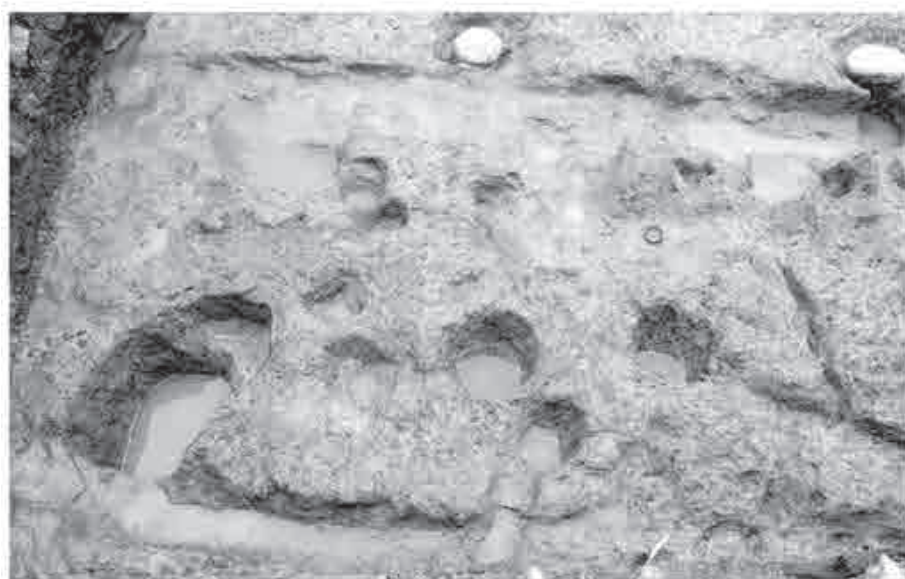
▼ f. 銅製品出土状況





◀ a. 第3面全景
(東から)

第3面全景 b. ▶
(南から)



◀ c. 調査区西側遺構群 (西から)

第3面



▲ a. 調査区北西域遺構群 (西から)



▲ b. 建物1、溝1 (北から)



▲ c. 建物1イー1 (南から)



▲ d. 建物1イー2 (西から)



▲ e. 建物1イー3、柱穴 (西から)



▲ f. 建物1イー4 (西から)



▲ h. 土坑4 (南から)



▲ g. 土坑1 (東から)



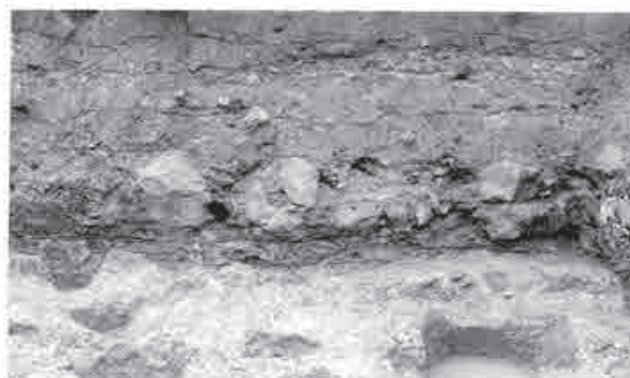
▲ a. 調査区南東隅トレンチ (南から)



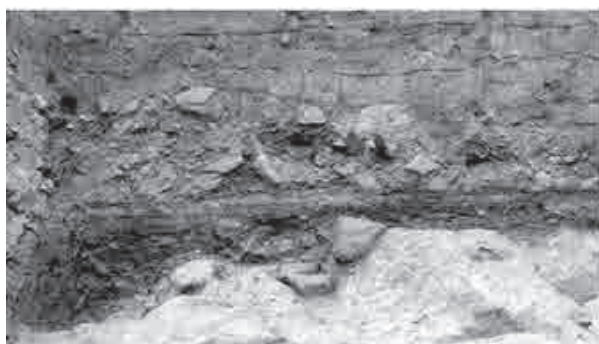
▲ b. 同左東側部分



▲ c. 西壁土層堆積



▲ d. 西壁北側土層堆積



▲ f. 西壁南側土層堆積



▲ e. 西壁中央土層堆積

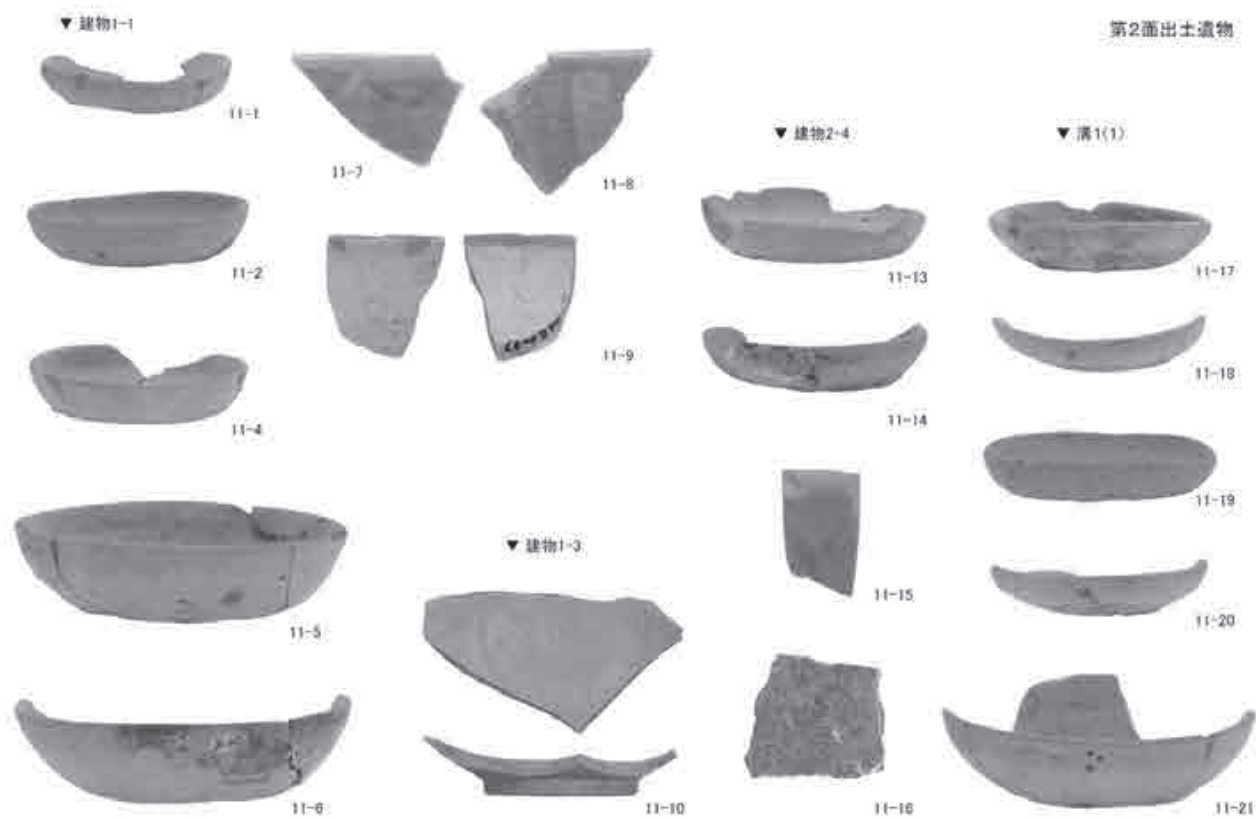
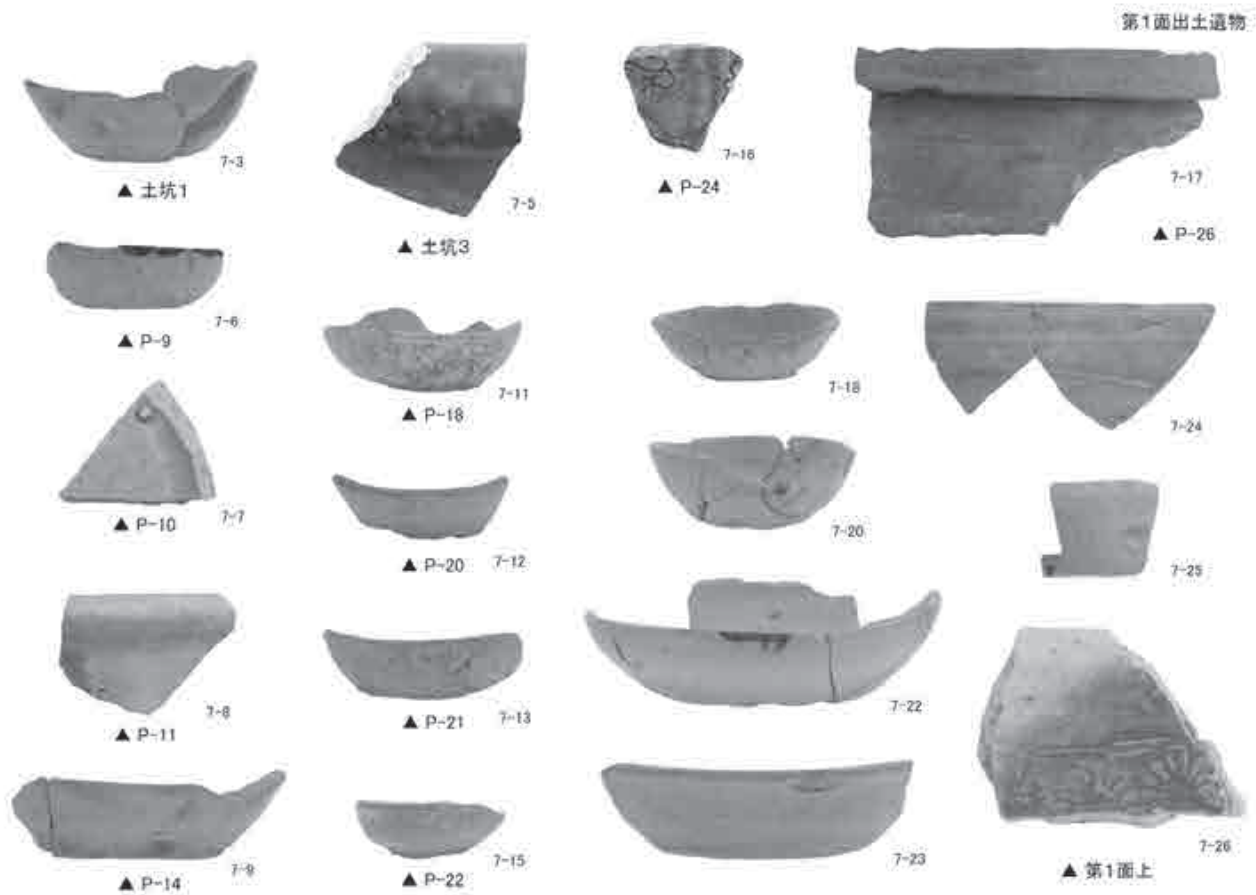


▲ g. 東壁土層堆積



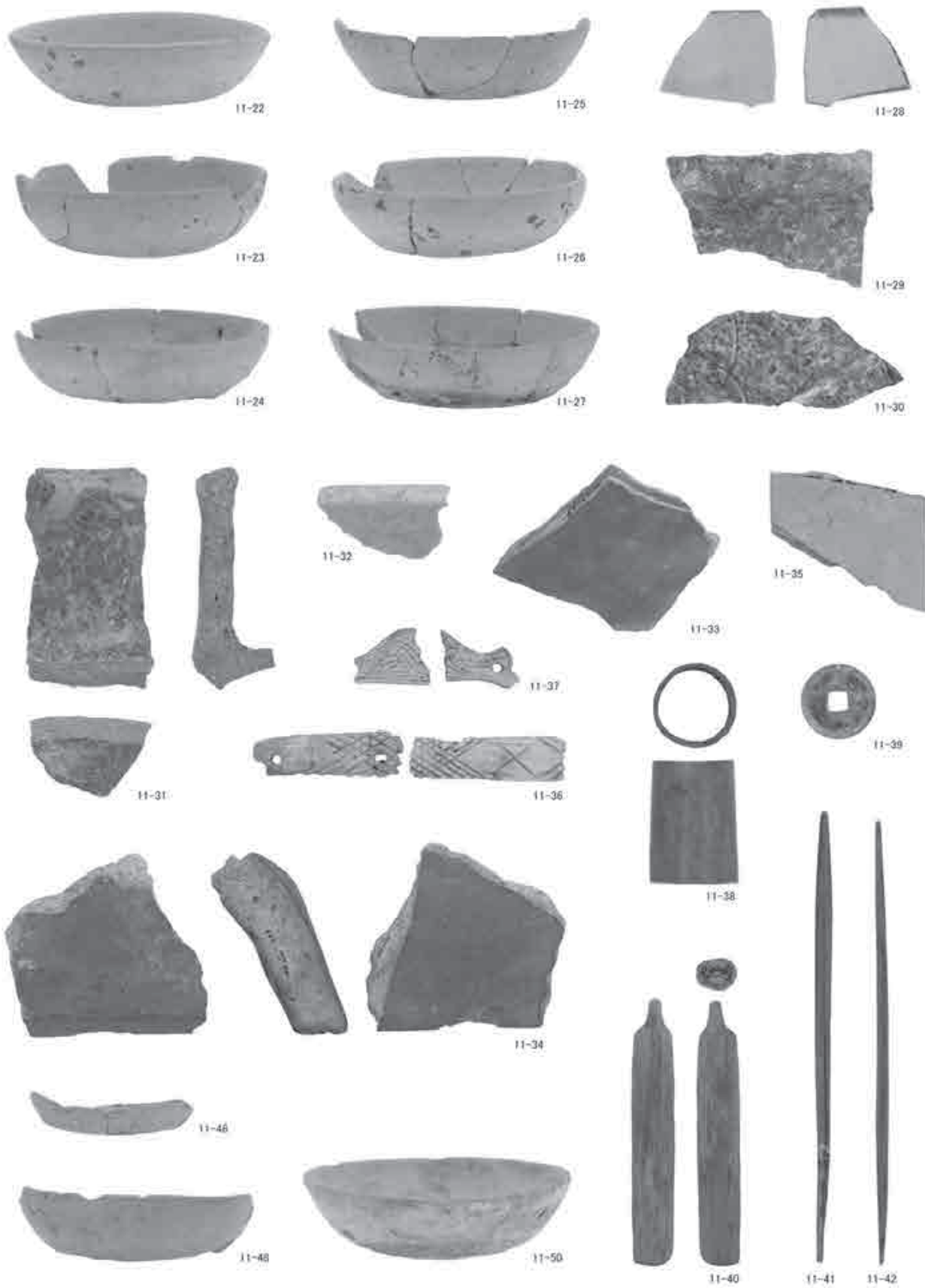
▲ h. 北壁溝1土層堆積

第3面下、調査区壁土層断面

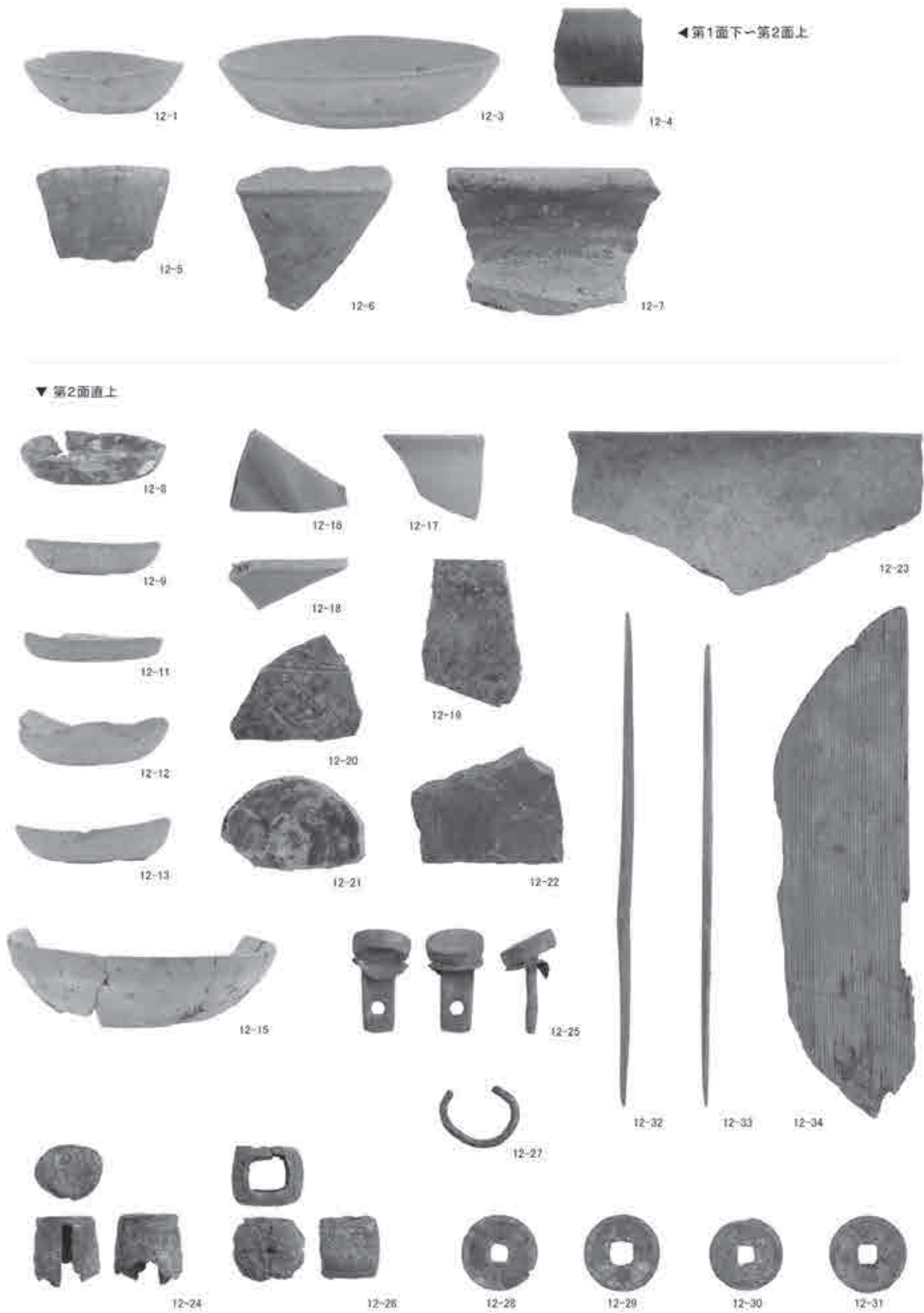


第1面、第2面遺構出土遺物(1)

漢1(2) ▼

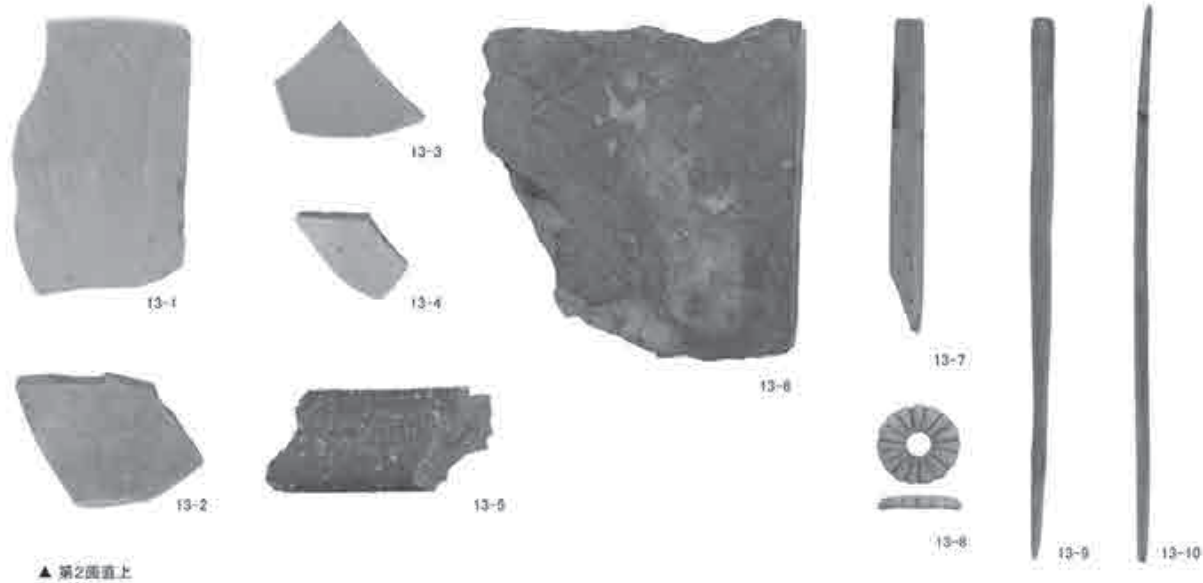


第2面遺構出土遺物(2)

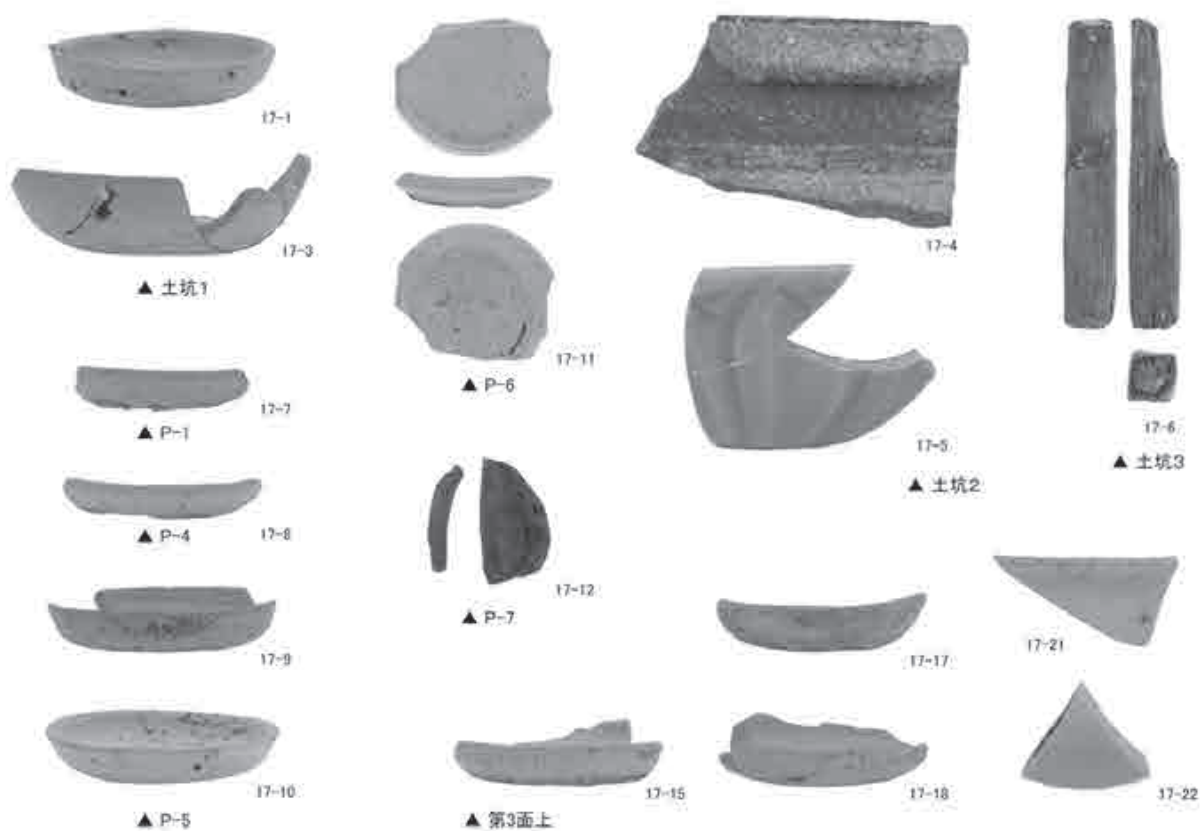


第2面遺構出土遺物(3)

第2面遺構



第3面遺構



第2面、第3面遺構出土遺物(4)

